

大阪音楽大学 研究紀要

第六十一号

要 旨 (1)

論 文

「21世紀教育改革」の歴史的総括試論
ー総括なき教育政策の迷走と矛盾ー
..... 藤本敦夫 (4)

研究ノート

外国語としての英語教材に生かすミュージカルの曲……クリンガー ウォルター カート…… (24)

本学のイタリア語学修にみられる問題点 谷口真生子 (40)

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目 (2021年度) (55)

大阪音楽大学
大阪音楽大学短期大学部
(2022)

要 旨

Summaries

【論 文】
Article

「21 世紀教育改革」の歴史的総括試論 －総括なき教育政策の迷走と矛盾－

藤本敦夫

「21 世紀教育改革」というのは 1996 年の中央教育審議会答申『21 世紀を展望したわが国の教育の在り方について 第 1 次答申』(通称『教育改革第 1 次答申』)に始まる今日 2020 年代に至る一連の「教育改革」を指す。筆者は「新自由主義教育改革」という呼称に共感しつつも敢えて本稿では「21 世紀教育改革」という呼称で分析を試みたい。

この 21 世紀教育改革なるものがもたらしたものは迷走と混乱ではなかったか。教育政策担当者は何を目指し、どのような成果を上げてきたのかの検証は行われていない。そして残念なことに、改革に「踊らされた」現場関係者、そして教員養成に関わる大学関係者も果たして何を成し得たのか、素朴な言い方だが「教育は果たして良くなったのか」が今こそ歴史を俯瞰して総括されねばならないと考える。

キーワード：教育改革史、新自由主義、教育の私事化、教育格差、教員制度

A Historical View of Japan's "21st Century Education Reform"

FUJIMOTO Atsuo

The purposes of this paper are to take a bird's eye historical view of so called "21st Century Education Reform" and to analyze what the "21st century education reform" has been brought and what has been achieved. Unfortunately, Authors Conclusion is that the Reform has brought straying, confusion, contradiction.

And who education in this country should be for, and what kind of awareness each person concerned should play in order to do so.

Also his article include criticism about those involved in education and those involved in teacher training who have been "dancing" with the reforms?

Keywords: History of Education Reform, Neo Liberalism Education, Privatization of Education, Educational Inequality, Teacher Recruit System

【研究ノート】

Note

外国語としての英語教材に生かすミュージカルの曲

クリンガー ウォルター カート

舞台の曲は通常、大きな声ではっきりと歌われ、ストーリーに沿って意味をなしていくものである。韻を踏む言葉の繰り返しのパターンは、言葉遊びであり、それゆえ美的に魅力的で、聞いていて心地よいものである。韻のスペルと発音に注意することで、EFL（外国語としての英語）の授業にどのように生かすことができるかを考察してみたい。以下のミュージカルの曲の韻を説明する。アニーよ銃をとれ、オクラホマ！、オリバー！、王様と私、グリース、キャバレー、スター誕生、オズの魔法使い、イースター・パレード、トップ・ハット、雨に唄えば、オン・ザ・タウン、紳士は金髪がお好き、お熱いのがお好き、ロッキー・ホラー・ショー、ドリームガールズ、ジプシー、エルヴィス・プレスリーの映画、アナと雪の女王、白雪姫。

キーワード：英語教育、韻、スペル、発音、ミュージカル

Songs from Musicals for EFL Classes

Walter Kurt KLINGER

Songs in musicals are typically sung out loud and clear, and their meanings are usually easy to understand as they relate to the storyline. The repeating pattern of rhyming words is a kind of wordplay, and as such is aesthetically appealing and pleasant to hear. This article discusses how songs from *Annie Get Your Gun*, *Oklahoma!*, *Oliver!*, *The King & I*, *Grease*, *Cabaret*, *A Star is Born*, *Wizard of Oz*, *Easter Parade*, *Top Hat*, *Singin' in the Rain*, *On the Town*, *Gentlemen Prefer Blondes*, *Some Like It Hot*, *The Rocky Horror Picture Show*, *Dreamgirls*, *Gypsy*, some Elvis Presley movies, *Frozen*, *Snow White*, and other musicals, can be productively used in EFL (English as a Foreign Language) classes especially by paying attention to rhymes and their spelling and pronunciation.

Keywords: EFL, rhymes, spelling, pronunciation, musicals

【研究ノート】

Note

本学のイタリア語学修にみられる問題点

谷口真生子

大学で音楽を学ぶ者にとってイタリア語を学修することは、どのような意味を持ちどうあるべきかを常に筆者は自問してきた。音楽大学のイタリア語科目の学修内容は、大学の外国語科目であるので、一般の大学のイタリア語の学修内容と同じであるが、本来は違ったものであるべきではと筆者は考えている。本論では、イタリア語学修の動機、学生が持つモチベーションや、学生側と教員側にある問題点を示しながら、理想的なイタリア語学修についてを考察する。

キーワード：音楽大学、イタリア語、大学の科目、モチベーション、問題点

Problemi vari dello studio della lingua italiana all'Osaka College of Music

TANIGUCHI Makiko

L'autrice si è sempre chiesta che cosa significhi e come debba essere lo studio della lingua italiana per gli studenti di musica all'università. Il contenuto delle lezioni di lingua italiana all'università di musica è uguale a quello delle università in generale, perché sono considerate dei corsi universitari di lingua straniera. Tuttavia l'autrice ritiene che dovrebbe essere diverso. In questo articolo l'autrice discute riguardo lo studio ideale della lingua italiana come materia universitaria, mostrando ciò che spinge allo studio dell'italiano, le motivazioni degli studenti e i problemi dalla parte sia degli studenti che dei professori.

Keywords :università di musica, lingua italiana, materie universitarie, motivazioni, problemi

【論 文】

「21 世紀教育改革」の歴史的総括試論 — 総括なき教育政策の迷走と矛盾 —

藤本敦夫

はじめに— 本稿における問題意識

本稿で「21 世紀教育改革」というのは 1996 年の中央教育審議会答申『21 世紀を展望したわが国の教育の在り方について 第 1 次答申』（通称『教育改革第 1 次答申』）に始まる今日 2020 年代に至る一連の「教育改革」を指す。

この間の教育改革については複数の呼称がある。「第 3 の教育改革」という行政側が一時用いた呼び方や教育関係者による「新自由主義教育改革」という批判的ニュアンスを込めた呼称もある。筆者は「新自由主義教育改革」という呼称に共感しつつも敢えて本稿では「21 世紀教育改革」という呼称で分析を試みたい。

2021 年の中央教育審議会答申のタイトルは『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現』であった。「令和」という元号を用いた時代区分に対して違和感があるのはもちろんだが、そもそもそれまでの「改革」の総括を欠いたまま、元号が変わっただけであたかも「新時代」であるかのような改革提案は果たして建設的な意味を持ちうるのかが不明確である。

結論を先取りして言うならば、この 21 世紀教育改革なるものがもたらしたものは迷走と混乱ではなかったか。教育政策担当者が何を目指し、どのような成果を上げてきたのかの検証は行われていない。そして残念なことに、改革に「踊らされた」現場関係者、そして教員養成に関わる大学関係者も果たして何を成し得たのか、素朴な言い方だが「教育は果たして良くなったのか」が今こそ歴史を俯瞰して総括されねばならないと考える。

近年になって、主に教育社会学分野の研究者による、そもそも「教育改革」そのものを疑問視する著作が相次いでいる⁽¹⁾。本論でも触れることになるが、教育研究者の責任も重大である。政府・文部科学省の改革に対して、それへの目先の対応ばかりに気を取られ、一過性のマニュアル的な書物を量産してきた「教育学者」の責任は重い。

この国の教育が誰のためにあるべきか、そのために各主体がいかなる自覚をもちそれぞれの役割を果たすべきかを考える前提を提起するのが本稿の目的である。

1. 「21 世紀教育改革」の沿革とその性格規定

いわゆる「21 世紀教育改革」は、2006 年の教育基本法改正、2007 年の教育関連三法改

正、そして 2008 年の学習指導要領改訂（高等学校については 2009 年）によって一つのピークを迎え、さらに 2010 年代以降は「教育再生実行会議」が「改革」を主導してきた。

これら一連の改革の起点は一般には、1996 年の中央教育審議会答申『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について』第 1 次答申（＝「教育改革第 1 次答申」）とされるが、ここではもう少し大きく、1980 年代以降の今日に至る教育政策の全体動向を俯瞰しつつ位置づけて、その本質と矛盾をやや批判的な観点も交えつつ理解を深めたい。

（1）1996 年以降現在に至る教育改革の背景と出発点

1996 年以降の教育改革は論者によって異なる呼称が用いられるが、単に呼び方の問題にとどまらない意味が潜んでいる。以下、三種類の呼称について検討する⁽²⁾。

① 「21 世紀教育改革」

この呼び方は、政府与党、文部科学省や教育委員会関係者等に多い。1996 年のいわゆる「教育改革第 1 次答申」の正式表題『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第 1 次答申』に由来するものであろう。最も無色な、その分、内容についてはほとんど語らない呼び方である。だが、本稿のタイトルにおいて敢えてこの呼称を用いたのはその矛盾に満ちた空虚さを表現したいがためである。

② 「第三の教育改革」

明治期の西洋近代教育制度の導入を「第一の教育改革」、戦後教育改革を「第二の教育改革」とし、それに匹敵する大規模な改革という意味で「第三の教育改革」⁽³⁾というものであるが、この呼称については、教育改革の曲折を反映してやや複雑な事情がある。

もともとは、1971 年の中央教育審議会答申『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について』（昭和 46 年ということから「四六答申」と通称。）によって提起されたものが当時「第三の教育改革」と呼ばれていた。しかし、答申直後のドルショック、さらにオイルショックという世界経済に甚大な影響を与えた経済変動に見舞われ、高度経済成長が終焉を迎えたことから、その提案の多くは計画倒れに終わった。

次に「第三の教育改革」が標榜されたのは、1980 年代中曽根内閣時代の「臨時教育審議会」の諸答申で提案された一連の改革であったが、これらについても、その多くが断片的に導入されるに留まった⁽⁴⁾。

1996 年以降今日に至る改革は、確にかつての「四六答申」で提案されていたものの未遂に終わっていた諸提案の実現を含み、また、臨時教育審議会以降いわば「つまみ食い」的に行われてきた諸々の改革⁽⁵⁾を法改正を伴う形で実質化していき、2006 年の教育基本法改正と翌年の教育三法改正によって、再統合・体系化を図るという側面が認められる。そういった意味では、改革の推進者の立場からすれば「(今度こそ) 第三の教育改革」と呼ぶべ

きものだったのかもしれない。だが、「四六答申」は高度経済成長を見越した「福祉国家政策」を基調とした公教育の拡大政策を基本としており、1980年代以降の「福祉国家」の見直し＝新自由主義を根底に置いた今日に至る「21世紀教育改革」とは基盤が異なると筆者は考えている。

③ 「新自由主義教育改革」

この呼び方は、教育改革の動向に対して批判的な立場の論者が用いる場合が多い⁽⁶⁾。筆者自身は、この呼び方が今次教育改革のある側面については正確な表現であると考えている。

「四六答申」は福祉国家戦略を背景としていたが、高度経済成長の終焉とともに先進資本主義国の多くが新自由主義経済政策に舵を切り、我が国でもそれは1980年代の中曽根内閣において鮮明になった⁽⁷⁾。

新自由主義経済は、「小さな政府」を目指すものである。具体的にはそれまでの福祉国家が抱え込んだ公的なこと業の多くを民間化し市場原理に委ねる「自由化」を行うことで、肥大化し硬直化した行財政の縮小、公務員の削減を実現し、もって社会経済の活性化を図るというロジックである。具体的には中曽根政権のもとで設置された臨時行政調査会によって推進された、いわゆる「臨調・行革路線」であり、国鉄の分割民間化に見られる大幅な公務員削減が象徴的である⁽⁸⁾。

中曽根内閣と同時期のアメリカではレーガノミクス（レーガン主義）、イギリスではサッチャリズム（サッチャー主義）が標榜されたが、それらも「新自由主義経済」に立脚したものであり、教育政策についてみれば、アメリカでは学校管理の民間委託による「分権化」、イギリスでは公立学校の地方政府からの離脱による教育の「私事化（privatization）」が試みられた⁽⁹⁾。

我が国の臨時教育審議会も中曽根総理の政治的思惑（「戦後政治の総決算」）⁽¹⁰⁾の一方で、「自由化」の名のもとに教育への公的支出を削減し、教育の私事化を推し進める基点となったのである。そういう意味で、今日の教育改革の直接のルーツは臨時教育審議会に求めるべきと考える。

ただ、臨時教育審議会の諸答申は、全面的に実現されたわけではなかったし、何よりも中曽根総理が最も望んだ教育基本法の改正は実現しなかった。文部省の頭越しに首相直属の審議会を設置し、中曽根ブレーンと言われたメンバーを多数委員に任命した上に⁽¹¹⁾、第1次答申で打ち出された「教育の自由化」の内容が「民間化」に通じるものであったため、文部官僚の抵抗が強かったことに起因すると思われる。（そういう意味では、新自由主義経済に基づく構造改革はいわゆる「小泉改革」の時期にまでずれ込むことになった。また、大規模な教育改革も後に持ち越され、一応の通過点である教育基本法の「改正」にみる我が国教育法制の大転換は安倍内閣まで持ち越された）。

(2) 新自由主義教育改革の本質～「平等」の放棄による格差社会と教育格差

臨時教育審議会以降の諸答申の特徴として、それまでの官僚の無味乾燥な作文と違って、審議会メンバー中の論客が文書作成を行うようになり、教育改革の論拠について、それなりの哲学なり世界観を開示して見せることが多くなった。しかし、それは、一貫して国民に対して新自由主義的教育改革の正当性を訴えるいわばキャンペーンの役割を果たしてきた。

たとえば、臨時教育審議会では全体として「平等」と「自由」を対比して、これからは「自由化」が大切だと説いていたが、当時はその「自由化」があまりにも極端な「私事化」であることから耳当たりの良い「個性化」という言葉に置き換えるようになった⁽¹²⁾。

そして、第14期中央教育審議会『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)』はより巧妙なレトリックを展開する。「平等」と「効率」を対比する。我が国の教育はその両立にこだわって「無理をしてきた」ためにさまざまな弊害が生じたとする。その上で、平等についておおむね達成されているのだが、しかしそれは形式的平等に過ぎず、これからは「実質的平等」を目指すべきだという。では、実質的平等とは何かというと、それは「個性の重視」だというのである⁽¹³⁾。

以後、第16期中央教育審議会が「平等」と「個性」を二者択一的に対置してみせたが、いずれの場合も、国民に対して「平等」を放棄するように誘導するものであった。なお、財界も「平等」をいわば悪者扱いして見せることで新自由主義的な教育改革を求めてきたものである⁽¹⁴⁾。

いずれにせよ、1980年代以降、国民生活のあらゆる局面において自己責任・自助努力が強調され、医療・福祉・教育等についても受益者負担の名のもとに、個々の国民に高負担が求められることになった(我が国の場合、所得控除の縮小や各種社会保障費負担の増大、消費税の導入とその税率引き上げによって、実質的な増税が続けられてきた。本来、自由主義経済が機能するには租税負担の軽減が不可欠なはずであるにも関わらずだ)。その第一の頂点がいわゆる「小泉構造改革」⁽¹⁴⁾であり、バブル崩壊以後の長引く不況や就職難の中で、深刻な「格差社会」⁽¹⁵⁾状況が生まれている。そして、今日では、教育機会の格差が深刻な問題となっており、教育現場にさまざまな困難をもたらしている。

(3) 21世紀に先行した教育構造の改革

①1998年という画期

1998年6月5日、報道が日本代表のサッカー・ワールドカップ初参加のニュース一色に染まる中、ごく一部の新聞がほんの数行でひっそりと報じていたのが学校教育法改正と教育職員免許法の改正であった。この法案の成立が日本の教育にもたらすものが、戦後日本教育の根幹に関わる大転換であったにもかかわらず、ニュースにさえならなかったことが不思議であった。

この年の主な「教育改革」は以下の3点である。

- ・学校教育法改正（複線型教育構造の導入、「中高一貫でゆとりある6年間」）
- ・教育職員免許法改正（教員に求められる資質・能力のシフトチェンジ）
- ・学習指導要領改訂（「ゆとり教育」の名目で学習内容削減、「総合的な学習の時間」等）

これらに、99年の生涯学習審議会答申⁽¹⁶⁾による「塾の認知」を加えて総合するとどうなるか？以下は、当時筆者がこれらを組み合わせて出来上がることになる教育構造を予測したものである。

②複線型教育構造の導入と教育格差

1998年改正学校教育法において、中高一貫教育が導入された。第16期中教審答申（通称『教育改革第2次答申』、1997年）における「教育における形式的な平等から個性の尊重への転換」が背景である。「受験競争の弊害の除去」「ゆとりある6年間で個性を伸ばす」というのが建前であった。

しかしその内容を詳しく見てみると、そこには戦後教育改革によって実現した平等な教育制度の構造を揺るがす重大な変更が加えられたことが見て取れる。

「中高一貫教育」の導入とは、三つの型の中高一貫から各自治体が選択的に導入できるというものであった。以下がその三つの型である。

i) 連携型＝連携型中学校＋連携型高等学校（設置者が異なる）

（それぞれの設置者の協議により、一貫性に配慮した教育課程を編成することができる。連携型中学校から連携型の高等学校への進学は面接や作文など「形式的試験」によるとされた）

ii) 併設型＝併設型中学校＋併設型高等学校（設置者が同一）

（同一の設置者による中学校及び高等学校において、中等教育学校に準じて一貫した教育を施すことができること、教育課程の基準に特例が認められるとともに、併設型中学校の生徒については併設型高等学校進学において入学者選抜を行わないものとする）

iii) 中等教育学校＝単一の教育機関で中高一貫教育を行うもの。

（校長における入学の許可、学力検査を行わないものとする。）

確かに高校入試の負担が軽減され、12-18歳の教育に「ゆとり」がもたらされるように見えるが、果たしてそうか。以下、問題点を指摘する。

- ・中等教育学校は確かに「学力検査は行わない」旨を明記しているが、選抜自体は行われる。具体的には調査書や作文、面接など（つまり、志願者は小学校で内申点を稼がねばならない）。
- ・併設型の中学校については選抜に関してなんの制限も明記されていない（つまり、なんでもありなので、小学生に受験競争をさせることになる）。

- ・併設型の中学校は高等学校と設置主体が同一でなければならないから、「都道府県立中学校」という「設置義務」が課せられない学校が創設されることになる。
- ・中等教育学校の前期課程及び併設型中学校では生徒に対する退学処分が可能。
- ・以上に対して、少子化の影響もあって定員割れ問題の生じている公立高校においては事実上高校入試が無意味化しつつあり、これはさしたる財政支出を伴わずに現状からの移行が可能。
- ・以上を総合すると、実際に導入されるのは少数の併設型とさらに少数の中等教育学校であろう。これが、公立部門のエリート中学校になることが予想される。他方、高校入試の負担軽減と引き換えにそれ以外の中学校の低学力化が懸念されることになる。

こうして、戦後教育改革で実現した「単線型」の学校体系の理念は放棄され、「複線型」への教育構造の転換が断行された。その結果、公立の中学校段階にまで格差が持ち込まれることになった⁽¹⁷⁾。

③ 教員に求められる資質・能力

1988年の教職法改正において、教職課程科目の負担増が行われ、一般大学における教職課程カリキュラムの単位数が増えて開放制教員養成の原則を脅かしていたが、98年の改正ではさらに以下の変更が行われた。

- 1)教科に関する科目の所要単位数の削減。
- 2)教職教養科目の増加：生徒指導関連科目の単位の倍化、カウンセリングマインドの必須化、情報処理、外国語コミュニケーション等。
- 3)変化の激しい時代にあって、「全人類的課題」と「我が国全体にかかわる課題」への理解を深め、それを生徒に指導する能力を身につける「総合演習」の必修化。
- 4)教職の意義・使命感等に関する科目新設（教職の意義及び教員の役割 教員の職務内容（研修、服務及び身分保障を含む。） 進路選択に資する各種の機会の提供等の科目、多くの大学で「教職入門」や「教職論」などの科目名で開設⁽¹⁸⁾。
- 5)教育実習の単位数増：中学校教員免許取得のための教育実習の所要単位数が3単位から5単位に改められた（うち1単位は大学における事前事後指導）。これにより、教育実習期間が長期化し、学生にとっての負担増と一般大学の専門教育への影響が懸念された⁽¹⁹⁾。

教職課程カリキュラム全体が「実践的」であることを求められ、しかも、総じて教員志望者が大学時代に身につけることが求められる能力が「教科指導」より「生徒指導」にシフトしているといえる。なお、この「実践的指導力」の問題は、後の2008年の教育職員免許法施行規則改正によって「総合演習」が廃止され、替わって2010年度入学生より「教職実践演習」が必修とされたことでますます顕著になる。

ところで、この年に「教育職員免許法特例法」の成立によって義務付けられたものが「介護等体験」である。授業科目ではなく、あくまでも学生が自主的に行う福祉施設での五日間、特別支援学校での二日間、合わせて七日間の「体験」の証明書が免許状「申請」の必須要件となる仕組みである⁽²⁰⁾。

これら教員養成カリキュラムの改革は、教員に対してもっぱら「人間としての心の豊かさ」「変化の激しい社会への対応」「生徒指導を中心とする現場の課題への対応力」といった資質・能力を求めるものであった。しかし、反面において専門教科における能力が後景に退いた感はぬぐえず、教員に求められる資質・能力の重点が教科指導力より生徒指導力にシフトしていると言えよう。

④ 「学校完全週五日制」と「ゆとり教育」の矛盾

先に述べた複線型教育構造の導入と教員に求められる能力のシフトチェンジに先だって、1998年には学習指導要領の第6次改定が行われた。移行措置期間を設けたことにより、その完全実施は2002年であり、このことをもって「2002年教育改革」と呼ぶ場合がある。その前提となる第15期中央教育審議会の教育改革第1次答申の論理は以下である⁽²¹⁾。

- ・21世紀に生きる日本人には「生きる力」が必要である。
- ・「生きる力」を育むためには「ゆとり」が必要である。
- ・ところが、実は学校が子ども達の「ゆとり」を奪っている。
- ・従って、「ゆとり」を取り戻すためには学校を「スリム化」しなければならない⁽²²⁾。
- ・そのために学校完全五日制を導入し、教育内容を削減するべきである。

こうして「ゆとり教育」が導入されたわけだが、「低学力化」を懸念する声は当初からあり、結局前代未聞の2003年途中改訂で、「ゆとり教育」に一定の修正を加えざるを得なくなり、2008年の第7次改訂では、「ゆとり教育」の放棄と教育内容の大幅増という迷走ぶりをさらすこととなった。また、ゆとり教育の目玉の一つであった「総合的な学習の時間」についても第7次改訂に際し一時廃止案まで浮上し、結局時間数を削って他の教科の時間増にあて、縮小方向で残すことになったのである。

このように振り返ってみると、「ゆとり教育」の10年間というのは、教育内容を削減し、教育現場には多大な負担を強いた10年として歴史に刻まれることになるのであろう。何よりも公立学校の教育内容を質・量ともに削減したことが、最大の問題である。しかも恐るべきことに、それは実は意図的なものであったのではないかという疑念がある。

そのことを示すのが1999年の生涯学習審議会答申である。表題とは裏腹に、この答申で最も注目を集めたのは、「塾」の取り扱いである。これまで、塾については私営の営利事業として通産省に委ねていた文部省が初めて塾を「民間の教育機関」として認知したのである。少し長くなるがその部分を引用しておこう⁽²³⁾。

「民間教育事業は、子どもたちの学校外での学習環境のひとつとして大きな役割を

果たしています」。

「学校・家庭・地域社会における教育のバランスをより良くしていくという観点から学校教育のスリム化が図られていく中で、これらの民間教育事業は学校教育とは異なる子どもたちの多様な学習ニーズに応じていくという役割が求められていくと考えられます」。

「学習塾でもキャンプや野外体験活動などのプログラムを導入しているところもありますし、学習塾で理科・科学実験教室などを開設するところもでてきています」。

「学習塾を含めた民間教育事業も、学校教育における基礎・基本のうえにたって、いわゆる受験のための知識や技術ではなく子どもたちの「生きる力」をはぐくむような自然体験・社会体験プログラム、創造的体験活動や課題解決型の学習支援プログラムなどの提供を進めていくことが望まれます」。

筆者なりに要約すると、学校教育で提供することが困難なものは塾に委ねるべきとし、体験的な学習等も塾で提供し得るし実験を行える学習塾もあるという。

さながら「塾」に学校の役割を肩代わりさせていくことを求めているように見えるが、これは全て営利企業であることを忘れてはならない。また、それだけ充実した内容を提供し得る塾というのは資金力のある大手の進学塾に限られるはずであるが、それには触れていない。何よりも当然のことながら親の教育費負担が増すことになるし、親の経済格差が子の教育格差に繋がることを意味する。これもまた教育の私事化を促進しようとするものであり、教育格差を助長するものである。

他方で、過度の塾通いの弊害やその防止策について言及してはいるが、その内容は PTA によるモニタリングなど、塾通いをさせている親に密告を迫るようなもので実効性は全くなかったと言って良い。

そもそも、ゆとり教育の論拠である、「学校が子ども達のゆとりを奪っている」というのは本当だろうか？実は、「公立離れ」の中で加熱する受験競争⁽²⁴⁾こそがゆとりを奪っているものであり、進学塾もその元凶の一つではないのか。全ての責任を学校に押し付けて、かわりに塾の営利活動を野放しにしたのではないか。

以上より、「ゆとり教育」とは、学校教育を必要最低限の内容に限定し、それを超える内容についてはオプションとして市場原理と受益者負担に委ねる方向性を具体化する役割を果たしたというのが真実であろう。

(4) 公教育縮減のねらい

これまで見てきたことを総合すれば、1998年を起点に起こった一連の出来事は、公教育の縮減方向に弾みをつける動きそのものであった。複線型教育構造を導入し、公立部門にエリートコースを作りつつ、圧倒的多数の公立学校には「ゆとり」の名のもとに「低価格で最

低限の教育」を行わせ、それ以上の教育を求める父母には受益者負担の名のもとに私費でこどもに教育を受けさせるよう誘導する。他方において、教員には教科指導より生徒指導に力を注ぐよう求めることで、「従順で素直な」一般市民の育成を求めるというものに結果としてなっていた。

政策担当者たちは、いわゆる「学力問題」をどのように懸念していたか、そこには確かに教育学上のある種の学力観があったことは間違いないであろう。ただ、ここで問題とするのは、経済成長と国家統治に必要なエリート層の育成に成功すれば、実はその他の者については高度な学力は求めていないと考えられる節があることである。

たとえば、学習指導要領第 6 次改訂を担った教育課程審議会会長であった三浦朱門へのジャーナリスト斉藤貴男によるインタビューでの発言がゆとり教育の本質を吐露している。長くなるが引用しておこう。

「学力低下は予測し得る不安と言うか、覚悟しながら教課審をやっとりました。いや、逆に平均学力が下がらないようでは、これからの日本はどうにもならんということです。つまり、できん者はできんままで結構。戦後 50 年、落ちこぼれの底辺を上げることにばかり注いできた労力を、できる者を限りなく伸ばすことに振り向ける。百人に一人でもいい、やがて彼らが国を引っばっていきます。限りなくできない非才、無才には、せめて実直な精神だけを養っておいてもらえればいいんです。…(中略)…平均学力が高いのは、遅れてる国が近代国家に追いつけ追い越せと国民の尻を叩いた結果ですよ。国際比較をすれば、アメリカやヨーロッパの点数は低いけれど、すごいリーダーも出てくる。日本もそういう先進国型になっていかなければなりません。それが“ゆとり教育”の本当の目的。エリート教育とは言いにくい時代だから、回りくどく言っただけの話だ。」⁽²⁵⁾。東京大学の入学生のほとんどが、私立進学校出身者で占められるようになっている事実からすれば、我が子にエリートコースを歩ませたい親は、自ら進んで公立で行われる教育を放棄し、私費で教育を「買う」のであり、そうした層のこども達でエリートが確保されるのであれば、新自由主義の下で公共サービスへの支出の削減をめざす政府にとっても好都合ということになるであろう。

現に「21 世紀日本の構想」懇談会⁽²⁶⁾は 2000 年にその報告書の中で、「例えば、初等中等教育では、教育の内容を精選して現在の 5 分の 3 程度まで圧縮し、週 3 日を「義務としての教育」にあて、残りの 2 日は、「義務としての教育」の修得が十分でない子どもには補習をし、修得した子どもには、学術、芸術、スポーツなどの教養、専門的な職業教育などを自由に選ばせ、国が給付するクーポンで、学校でもそれ以外の民間の機関でも履修できるようにすることが考えられる」⁽²⁷⁾と述べている。

将来的には義務教育は週三日制として、最低限の内容に限るべきとの提言を行っている。それはさながら「愚民政策」の様相を呈し、俄かには信じがたいし、また信じたくない話ではあるが、しかし、1980 年代以降の政府関係者や財界からのさまざまな提言がそれを裏付けている。

2. 労働市場の変化と進路選択の困難

1980 年代以降の新自由主義が生み出した弊害が現在の日本社会の格差状況を生んでいるが、子ども・青年にとって将来の展望が見出しにくい状況もこのころから準備されてきたものである。ここでは今日において青少年の教育と密接に関わらざるを得ない労働市場において新自由主義が何をもたらしたのかを検討する。

(1) フリーター問題

「フリーター」とは英語のフリーランスと独語のアルバイターによるフリーランス・アルバイターに由来する造語であり、この言葉を 1987 年に大々的に世に広めたのがリクルートフロムエーであった（なお、同社は『フリーター』というタイトルの映画まで製作・公開している）。

もちろんこの言葉は海外では通用しないし（強いて英語にすれば **Permanent Part-Timer** となる）、「自由人種」「新しい生き方」「いつまでも夢を持ち続ける」などの美しいコピーとは裏腹に、企業から見れば必要な時に雇えて社会保障や福利厚生も手当てする必要がなく、用がなくなったら簡単に切り捨てられる流動労働力にすぎないというのが現実である。

今日の大学生の多くは、このまやかしを見抜いているし騙されなくなっているが、バブル経済のピークに向かう当時であって、実際にフリーターは優遇されていたし、見かけ上、正社員より収入の多いフリーターも数多く存在した（もちろん、正社員と違って社会保険等の控除がないことや、日給や週給で手取り早く稼げるなど、あくまで見かけ上の錯覚にすぎないが）。それが多くの若者を引き付けたのは事実である。

こうしてフリーターブームをあおりつつ、その陰で 1984 年～1988 年にリクルート・コスモス社は与党の領袖クラス（その中には当時の中曽根康弘首相も含まれていた）、文部省、労働省のトップ官僚に値上がり確実な未公開株という形での賄賂をばらまいていた。後に発覚する大規模な汚職事件＝「リクルート事件」⁽²⁸⁾である。動機は江副社長の政官財界での存在感を高める狙いととも、労働市場や就職情報等の規制緩和、有利な取り扱いを受けするためであった⁽²⁹⁾。

バブル期にこうした企業と労働省・文部省、そして政治家が結託して人為的に作り上げてきた構造は確実に若者の意識に影響を及ぼしている。フリーターと言う非正規かつ使い捨ての若者が発生することを正当化した共犯者であると言って良い文部科学省と厚生労働省が 2000 年代になって、フリーター問題の深刻さを指摘し、「フリーター撲滅運動」や「フリーターにならない教育」等の提案をするようになったのは、あまりにも無責任と言わざるを得ない。

(2) 労働者派遣法

フリーターブームと前後して、1986年に労働者派遣法（正式名称：「労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の保護等に関する法律」以下、単に「労働者派遣法」とする）が制定されているが、これもやはり新自由主義のもとでの規制緩和であった。本来は特殊かつ高度な技術を持った人材の流動化を図るもので適用される業種は限定的であったはずであるが、その後1999年の改正で業種が拡大され、2004年のさらなる改正で製造業における労働者派遣が解禁された。これがリーマンショック以後の深刻な派遣切り問題の発端になっているわけだが、ひとたび経済状況が悪化すればこうなることは容易に予想されたはずである。その間に、実際には派遣会社が多くのフリーターの受け皿となってきたのも事実である。

そもそも職種によっては労働者の派遣や職業のあっせんを民間企業が行うのは違法行為だったのであり、労働者派遣法はいわば、それまで職業安定法によって違法とされていた労働者供給事業をいわば「合法化」したものと考えられるのである。さらに、法制定当初は女性の社会進出やコンピューター関連などの専門スキルの需要に応えるという限定的だったものが、その後数次にわたる「改正」によって次第に対象職種が広げられ、本来の目的を外れて大量の非正規労働者を生み出すこととなった。これも若年層から現役世代の年収が抑えられることにつながり、結婚や出産をためらう若年層の増加とさらなる少子化を招くことになった。

(3) 就職協定の廃止

1991年経済団体が就職協定を一方的に廃止した⁽³⁰⁾。

これを黙って見過ごしたのも文部省と労働省である。それまでは、大学生の就職活動は最終学年の7月20日が解禁日であった。しかし、就職協定により企業の求人活動と学生の就職活動に歯止めがなくなった。

このため、学生によっては大学3年生で内定を取り付ける者が現れるなど、就職活動の早期化がエスカレートしていった。一部の大学では、学生の就職内定率を上げることが大学の評価を左右することから、積極的に「シューカツ（就職活動）」を奨励するようになっているが、それは大学本来の学業よりも就職活動を重視するという倒錯を生み、大学教育と学生生活を破壊する圧力となっている⁽³¹⁾。

(4) 進路選択における困難と課題

以上みてきたように、教育をめぐる状況変化とともに、こども・青年の進路選択に関わる状況も激しく変化してきた。ここにおいても「新自由主義」の名のもとに推し進められた資

本の論理のしわ寄せが若い世代に集中的に影響していることを見て取ることができる。

筆者の個人的な見解としては、働くこと、就職することに意味を見出せる労働環境を整えること（これはもちろん政治と行政の責任でやらしてもらわなければならない）、企業倫理の向上（ある部分、行政による規制強化に頼らざるを得ない部分もあろう）を前提に、若者には現代日本の現実の正しい理解、その改善の展望、働くことの意味、働きがいといったことを考えさせることが大切になってくると考える。そのためにも教員や親が自分たちの学生時代と現在の何がどう変化しているかについて理解を深めていかななくてはならないであろう。「キャリア教育」が単にやみくもに就職を指導するだけのものに堕さないためにも上記のことは不可欠の視点であると考ええる。

3. 「21 世紀教育改革」で教育は改善されたのか？

現時点において、その「成果」を挙げることさえ困難であるというのが筆者の認識である。特に 2000 年代に入ってから、政権による「教育再生」ということが推進され、そのもとで実は教育改革は一層の迷走と矛盾を引き起こすことになった。

一体に、政権が支持率を上げたい時に「教育改革」を持ち出すのは万国共通と言って良い。かつてのイギリスの「教育大討論（Great Education Debate）や中曽根政権の臨時教育審議会、安倍政権の教育再生会議と教育再生実行会議など、枚挙にいとまがない。しかし、日本において顕著なのは、それら「改革」の検証がなされないままに次々と場当たりの施策が言葉は悪いが「垂れ流される」ところにある⁽³²⁾。

ここでは、典型的な悪循環の例として教員政策を取り上げてみたい。

1998 年の教育職員免許法改正は教員の役割を生徒指導に大きくシフトチェンジしたことは既に述べた。21 世紀に入ってから大きな「改革」を検討する。

2003 年、学習指導要領の部分改訂という前代未聞の出来事があった。「ゆとり教育」で懸念された学力低下に対する親、教育現場や教育研究者など様々な主体からの不安が無視できなくなったこと、また、国際学力調査 PISA において OECD 各国中日本のスコアが最低だったという、いわゆる「PISA ショック」がそれに追い打ちをかけた。

その一方で、学校教員の「指導力不足」や「不適格教員」問題が取りざたされるようになり、以前にも増して「教員の資質向上」が改革課題とされた⁽³³⁾。

その結果「教員免許状更新制」が導入された。教員免許に 10 年の有効期限が設定されるとともに主に大学で開設される「教員免許状更新講習」を受講した上で「認定試験」で合格しなければ免許状が失効するというものだ。

また、2012 年の中央教育審議会答申⁽³⁴⁾は教職大学院を今後の教員養成の主軸とする提案を行った。（筆者としては教育学研究にとって実は将来的に困った問題になると考えている）⁽³⁵⁾。

さらに 2015 年の中央教育審議会答申『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上

について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)』。(2015年)の提言により、教員の「養成・採用・研修の一体的改革」が推し進められた⁽³⁶⁾。「教員育成協議会」の設置が自治体に義務付けられ、そこで策定される「教員育成指標」に基づく養成・採用・研修の計画化が求められ、大学の教職課程には「教職課程コアカリキュラム」が策定された。

そして、現在盛んにニュースになっている「教員の働き方改革」や「チーム学校」という掛け声で主に地方の努力を鼓舞する形になっている。

しかし、あれだけ全国の大学と現職教員に負担をかけた免許状更新制は2022年に廃止され、「教員育成指標」も作りっぱなしで終わっているのが現状ではないか。もっと言えば、「それどころではない」事態に陥っているのではないか。

端的に言ってこれらの施策によって「教員の資質」は向上したのか。

残念ながら、悲観的な見方しかできない。

教員採用試験志願者の減少と倍率の低下は危機的である⁽³⁷⁾。一見志願者数が減っていないように見えるのは2007年前後の団塊世代の大量退職に伴う大量採用によって、長く臨時的採用者だった講師が順次採用を果たしたからで、志願者自体は実は増えているために相対的に倍率が低下して見えるだけだと文科省の高官は釈明するが、新卒教員の質の低下は否定できない。特に小学校教員は深刻である。倍率の低下もさることながら合格率の上昇こそ憂慮すべきである。その一方で、これだけ志願者がいても現場では教員が足りないということが各地で深刻な問題になっている。

また、教員のモラルの低下は「人格問題」とまで評される惨状を呈している⁽³⁸⁾。

「ブラック校則」や体罰、いじめ問題への対応の鈍さの問題等、教員・教育委員会の人権意識の欠如には目を覆わんばかりである。

「チーム学校」にしても、教員の働き方改革の一翼を担うはずが却って現場の混乱を招いている現状も指摘される⁽³⁹⁾。

まとめにかえて

本稿では、1980年代以降の教育改革の歴史を現時点で俯瞰的に総括することを目的とした。端的に言って、教育の公共性を放棄し、本来であれば公費によって賄われかつ十分な教育を提供すべき公教育の縮減がひたすらに推し進められてきた歴史であった。残念ながら、近年の教育社会学系の多くの識者が指摘するように、「検証なき改革」の繰り返しと格差の拡大を招きつつ、児童・生徒の学習環境が向上してきたとは言えないと考えざるを得ない。

広田照幸によれば「問題をはらんだ改革は、すぐに新しい問題を教育制度や教育実践に生み出してしまうこともあるし、時間をかけて教育制度や教育実践をじわじわと歪めていってしまうこともあります。だから、おかしい改革論は現実化しないほうがいい。『変な改革

はやらない』という選択をもっと政策決定の場で重視していただきたい」と述べている⁽⁴⁰⁾。

この 21 世紀教育改革と言う名の教育改革ラッシュは教育格差の拡大、学力格差、教員の資質の低下をむしろ招いたのではなかったか。

川口敏明は言う。「家庭環境や地域の状況によって子どもたちの育ちに差が出るのは、私たちの社会の在り方が招く当然の帰結である。その意味では、教育格差は私たちの『社会の失敗』の表れなのだ。教育格差の背後にある社会の在り方という根本的な要因から目を背け、学校単独でできることを探っても、それは学校や教員に負担を押しつけているだけである」⁽⁴¹⁾。

教員政策にしても、また、本稿では紙幅の関係で掘り下げることができなかったが教育内容政策についても、短いスパンで検証も反省もすることもなく「場当たりの」「ためにする」「改革」が続けられてきた歴史であったと断じるしかないと考えている。

この間、教育に関してどれだけの「死語」が量産されてきたことか。

教員免許状更新講習に踊った養成側の大学教員が我が意を得たりとばかりに連呼した「省察」…最近誰も言わない。現学習指導要領のための中央教育審議会の『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて - 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(中間報告)』(2015 年)では「アクティブ・ラーニング」や PBL(Problem Based Learning)が強調されており、教育方法学分野で関係書の出版ラッシュが起きたが、すっかりなりを潜めてしまった。2006 年前後にもはやされたフィンランドの教育のブームも最近では話題にもならない⁽⁴²⁾。

教育研究者でさえもこの 30 年間教育政策の迷走と矛盾に振り回されてきたのではないだろうか。付和雷同。その結果として、肝心の教員養成の本筋を見失い、ひいては教育現場に優れた人材を送り出せなくなってきたのではないだろうか。

もちろん、最大の非は政府・文部科学省にある。教育基本法第 9 条(旧法では第 6 条)の趣旨を遵守し、教員の手厚い身分保障と待遇の改善をするべきところを、その逆の政策を押し進めた実質的法令違反の罪は重い。

「21 世紀教育改革」について、しっかりした検証を行わずに場当たりの「改革」を押し進めるのではなく、地に足の着いた教育政策を進めるべきであると考え。そのためには、実は中央教育審議会の言う「日本の教育」とは別の意味での我が国の学校現場・教員が積み重ねてきた「日本的」で良質な部分を再評価すべきだと考えているが、それについては別に稿を起こしたい。

註

(1) 本格的に教育改革論議そのものについて疑問を呈した一般向けの著書としては、現在オックスフォード大学で活躍する教育社会学者荻谷剛彦の『なぜ教育論議は不毛なのか』(中公新書ラクレ、2003年)あたりが代表例であろう。広田照幸著『教育論議の作法—教育の日常を懐疑的に読み解く—』(時事通信社、2011年)などが教育改革というよりはそもそも教育問題と呼ばれるものについて冷静な議論を喚起する。その後も同氏の活発な執筆活動が続き『教育改革のやめ方』(岩波書店、2019年)に至っては正面からそもそも「教育改革」そのものの意義を根底から疑う著書を発表する。それに呼応するかのようになり、今日の教育社会学系の研究者によるドラスティックな主張が噴出している。石井英真編著『流行に踊る日本の教育』(東洋館出版、2021年)など枚挙にいとまがない。本稿執筆者もこれらの研究者の問題意識を共有するものである。

(2) なお、教育改革の画期については論者によってさまざまであり、現在の改革を「第5の教育改革」と観る向きもある。参考までに以下。

「実は5回目?日本の教育改革の歴史 | これまでの日本教育の歴史を徹底解説」

<https://studystudio.jp/contents/archives/42361>

(3) 答申冒頭に「この答申は、明治初年と第二次大戦後に行われた教育改革に次ぐ「第三の教育改革」と位置付け、学校教育全般にわたる包括的な改革整備の施策を提言している」と宣言している。中央教育審議会『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について』—答申—(1971年)。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm#2

(4) 臨時教育審議会の第一次から第四次に至る諸提案は以下のように大変網羅的なものであった(以下の各項目の○数字は答申の番号)。

- ・徳育の充実②
- ・教育内容の改善②
- ・外国語教育・日本語教育の充実等②
- ・情報化への対応のための諸改革②
 - 学習指導要領第5次改訂
 - 指導要録改訂=「新学力観」
- ・幼稚園教育の振興②
- ・国際化・情報化への対応②
- ・教員の質の向上②
 - 『教員の資質能力の向上方策等について』答申(87)
 - 教育職員免許法改正(88) = →免許状の種別化 =
 - 教育公務員特例法改正(88) = 初任者研修制度創設(89)
- ・教科書制度の改革③

→教科書検定制度「改善」(89)

- ・文教行政の改革
- ・生涯学習体系への移行②
- 生涯学習局設置 (88)
- 生涯学習振興法 (略称)

(5) 総合的な拡張整備ということで予算措置を伴う法整備・計画が行われた。

- ・義務教育標準法：小中学校の学級編制、教職員定数に関する最低限の条件を定めた (1958 年制定、最近改訂は 2021 年)
- ・高等学校標準法：高校整備に必要な財源を地方交付税で確保するとともに、高校の定時制・通信制教育を拡大。また職業教育の多様化を計る (1961 年制定、最近改訂は 2022 年)
- ・国立大学の入学定員の増員計画 (時々の政策により策定)
- ・人材確保法：教員給与の改善や現職教員の再教育 (1974 年制定)

一方、同答申は 1980 年までの「総合的な拡充整備のための資源の見積もり」を明示していたが、高度経済成長を前提とした試算であることから国民所得比は変わらないままに教育投資額は 29790 億円から 93550 億円に増額するというものであり、高度経済成長が終焉を迎えたことにより財源が確保できなくなったものである。

なお、46 答申で提案されていた教員の資質向上のためのインターン制や高等学校の多様化などは臨時教育審議会の諸答申を受けた中央教育審議会をはじめとした各種審議会の答申によって順次政策化・法制化されていった。

(6) 多数の著作があるが、ここでは世取山洋介・佐貫治編著『新自由主義教育改革—その理論・実態と対抗軸』(大月書店、2008 年)を挙げておく。

また、教育行政・教育政策形成の内部にいた元官僚による総括も 1980 年代からの転換を裏付けている。児美川孝一郎・前川喜平『日本の教育、どうしてこうなった?』(大月書店、2022 年) pp.14-15。

(7) 新自由主義に関しては森永卓郎著『「騙されない!」ための経済学 モリタク流・経済ニュースのウラ読み術』(PHP 研究所、2008 年)。また、新自由主義の教育政策・改革について世取山・佐貫編著前掲書。

(8) 国鉄の分割民営化は 100 万人の国鉄労働者を民間企業の労働者とすることで大規模な公務員削減であった。小泉政権では郵政民営化が断行されたが、これも 30 万人の国家公務員の削減と単純化できるであろう。さらに国立大学の独立行政法人化は 10 万人の国立学校教職員を名目上国家公務員から準公務員に身分変更するものであった。それらは共に自由競争と独立採算という名の自己責任を求めるものでもある。

(9) さらにイギリスにおける「教育の私事化」に関してジェフリー・ウォルフオード著 岩崎法雄訳『現代イギリス教育とプライベートアタイゼーション』(法律文化社、1993 年)。また、拙稿「第 12 章 教育行政改革の動向と課題」(細井克彦・田中耕二郎編著『子

- どもを生かす教育行政』ミネルヴァ書房、1993年) 及び拙稿「第12章 イギリスの場合」(高木英明編著、『地方教育行政の民主性・効率性に関する総合的研究』(1995年、多賀出版)において、新自由主義的な公教育の縮減について分析している)。
- (10) 「それ以前に中曽根康弘元首相が教育基本法の改正に意欲を燃やしていた。中曽根さんにとって、教育基本法の改正は憲法改正の露払いというか前段階という位置づけでした。中曽根さんは個人より国家が大事だと考えていた人ですから、それを明確にした憲法にするためにはまず教育基本法を変えなければいけないと思っていた」(前川喜平『自由の危機 第4回 教育から自由が奪われ続けている』(2021年)
<https://shinsho-plus.shueisha.co.jp/column/jiyuunokiki/13156>
- (11) 臨時教育審議会の委員には香山健一、瀬島龍三といった首相腹心のブレーンの他、政治観・国家観を一にするメンバーが数多くみられる。委員の選定から発足にまつわる政治的駆け引きについては大森和夫著『臨時教育審議会 3年間の記録』(光書房、1987年) pp.45-58に詳しい。また、臨時教育審議会主要メンバーについてのプロフィールやバックグラウンドについては内田健三著『臨教審の軌跡』(第一法規、1987年)「序章」p.1-32に詳しい。過去の教育関係の審議会についてその構成メンバーの出自にまで注目が集まった点でもいかにこの審議会が異例なものであったかが伺えよう。
- (12) 原田三郎『臨教審と教育改革』(三一書房、1988年) pp.95-113、「第6章 自由化論争」に経緯が詳しい。
- (13) 第14期中央教育審議会『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について』一答申一(1991年)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/910401.htm#2
- (14) 内閣府「小泉内閣の構造改革解説(平成15年)」(2003年)。
<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/explain/pamphlet/0303/index.html>
- (15) 川口俊明編『教育格差の診断書』(岩波書店、2022年)はデータに基づく堅実な分析が読み取れる。また、日本の高校生に関してメアリー・C・ブリントン著、池村千秋訳『失われた場を探してーロスト・ジェネレーションの社会学』(NTT出版、2008年)が外国人から見た日本の社会学的分析であることで学ぶべき点が多い。
- (16) 生涯学習審議会『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむー「青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」一(答申)(1999年)
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11117507/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/1315211.htm
- (17) この中高一貫を提言した教育改革第一次答申が義務教育制度(中学校)への「複線化構造」の導入が格差を積極的に肯定していくものであったことについては、土屋基規編著『現代教育制度論』(ミネルヴァ書房、2011年) pp.77-79参照。
- (18) 教職課程において「使命感」とか「児童生徒に対する教育的愛情」というような「感情

労働的」「道徳的」内容が強調されている点も教育職員免許法全体の構造が学力よりも生徒指導にシフトしていることと符合する。

- (19) 実習 4 単位をそのまま実施すると実習期間は 4 週間になるが教員養成系以外の多くの一般大学では学内規定を変更し実習 1 単位を 30 時間とし、30 時間×4 単位=120 時間と計算する。これにより、実習中は教員と同じ勤務時間となるため週 40 時間とすれば 3 週間で 120 時間を満たすとする計算を文部省が認めたため、教員養成系大学以外の多くの大学では 3 週間実習とすることとなった。なお、本来 2 単位のままの高校での実習期間については曲折があった。中高両方の免許取得を望むなら実習校が高校の場合 1 週間分足りなくなる。高校側として実習期間が延びることに難色を示す場合もあるためだ。この点について、神戸市教育委員会と校長会と大学の三者による協議の事例については拙稿「教員の資質向上神戸市連絡協議会年次報告」（阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会『阪神教協リポート No.26』（2003 年）参照。
- (20) これは「神戸事件」を契機に「心の教育」の重要性が叫ばれる中、教員志望者に「豊かな心」を求めるという趣旨であったが、導入当初は「実習」でなく「体験」であることの違いが大学と受け入れ側双方に不徹底だった例も多く、さまざまな混乱を招いたものでもある。
- (21) 第 15 期中央教育審議会『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第一次答申』（1996 年）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm
- (22) なお、「ゆとり」の必要性については、1977 年の学習指導要領第 4 次改訂においてもみられたが、その時は「学校教育の中にゆとりを」として「ゆとりの時間」を創設したものであり、学校教育そのものを縮小しようという発想とは全く違うものであった。
- (23) 生涯学習審議会、前掲。
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11117507/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/1315211.htm
- (24) 例としてベネッセ教育総合研究所の 1988 年調査。
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3279>
中学受験の動機として、「とても行きたい中学がある」がトップを占めているが、「受験したい中学はどんな中学か」の問いについては「いじめや非行がない」がトップを占めている（それぞれ子どもに対する調査）。
1980 年代は第 2 次ベビーブーマー（あるいは「団塊ジュニア」とも呼ばれた）による 18 歳人口増のピークであることによる高校・大学受験の競争率が高まっていた。一方、全国的に校内暴力・非行が社会問題化していたことも影響していると考えられる。
- (25) 斉藤貴男『機会不平等』（文藝春秋社、2000 年）p.40。

- (26) 『21 世紀日本の構想懇談会報告書 日本のフロンティアは日本の中にある (総論)』
同懇談会は 1999 年 3 月、小渕恵三首相の私的な有識者懇談会として発足。主要メン
バーは財界人が占める。
<https://www.kantei.go.jp/jp/21century/houkokusyo/0s.pdf>
- (27) 同上。
<https://www.kantei.go.jp/jp/21century/houkokusyo/1s.pdf> p.19。
将来的には義務教育は週三日制として、最低限の内容に限るべきとの提言を行って
いるが筆者の私見では、それはさながら「愚民政策」の様相を呈し、また、バブル崩
壊後の長引く就職氷河期で若者から現役層に一層の格差拡大が予想される中で教育
格差の拡大もいとわれないということを意味している。なお、筆者が敢えて「愚民政策」
という表現をするのは斎藤貴男前掲書の「第一章 ゆとり教育と階層化社会」の詳細
なルポに拠っている。
- (28) 戦後最大の疑獄事件と言われる「リクルート事件」についてはいささかジャーナリ
スティックな書物であるがさしあたり田原総一郎著『正義の罟 - リクルート事件と
自民党 - 20 年目の真実』(小学館、2007 年)を参照の事。
- (29) 贈賄の主な目的は求人情報や就職活動に関する情報の独占を狙ったものであり、その
ため文部科学省と労働省のトップによる受託収賄が発覚し起訴された。高石邦男元
文部事務次官は収賄罪で起訴され一審で懲役 2 年執行猶予 3 年、二審で懲役 2 年 6
ヶ月執行猶予 4 年、加藤孝元労働事務次官は受託収賄罪で起訴され一審で懲役 2
年執行猶予 3 年が確定した。
- (30) 就職協定について、実態や各経済団体の要請等が整理されてわかりやすい論文として、
中島弘至「就職協定(就活ルール)の通史的分析 —個性ある時代の抽出と協定史に
根づく問題点—」(東京大学 『大学経営政策研究 第 9 号』(2019 年) pp.157-173。
- (31) これは筆者が実際に身をもって痛感している。個人的なことになるが、ある非常勤先
の大学では実際に授業の出席よりも企業訪問を優先する指導が行われている。3 回生
で内定を取るということは、学生は 3 回生の間就職活動に奔走することになる。授
業担当としては来たり来なかつたりする学生が多数発生するので、継続したテーマ
の授業の学生による理解度が心配になるし、遠方の企業だと交通費・宿泊費もかさむ
という学生の愚痴も聴くことになる。
- (32) 「残念ながら、ここ数十年、日本の教育改革は関係者の思いつきで根拠なく始まり、
その検証もされないままに終わるということが繰り返されてきた。いわゆる「ゆとり
教育」や大学改革は、その典型的な例である。川口俊明編 前掲書『教育格差の診断
書』(岩波書店、2022 年) p.202。
- (33) 児美川孝一郎、前川喜平前掲書、p.117-120。
- (34) 中央教育審議会『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策につ
いて』(答申)、2012 年。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm

(35) 国立の教員養成系の教育学部を原則として学術的な修士論文を求めない教職大学院に転換することによって、我が国教育学アカデミズムの衰退が懸念される。たとえば、10 数年後には「教育哲学」や「教育社会学」「教育行政学」の研究者が不足することになる。そうなった時、大学の教職課程で「教育原理」や「教育社会学」「教育行政学」を担当する若手研究者がいないということになる。研究者養成についていかなる見通しを持っているのか、政府・文科省のビジョンが全く見えてこないのだ。

(36) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm

(37) 教員採用試験の受験者・採用者・競争倍率の推移（1998 年と 2022 年）

文部科学省による「公立学校教員採用選考試験の実施状況」を元に最新の 2022 年採用分を加えた予備校のサイト「教員採用試験の倍率推移【1979～2022】「よびめも」(eigo-dosurukosuru.net)」より筆者が抜粋して作成。

<https://eigo-dosurukosuru.net/english-test-information/kyousai/kyosai-bairitsu/>

小学校

採用年度	受験者数	採用者数	競争倍率
1998 (H10)	46,158	4,542	10.1
2022 (R4)	40,636	16,152	2.5

中学校

採用年度	受験者数	採用者数	競争倍率
1998 (H10)	52,583	4,275	12.3
2022 (R4)	42,587	9,140	4.7

高等学校

採用年度	受験者数	採用者数	競争倍率
1998 (H10)	37,437	3,419	10.9
2022 (R4)	23,991	4,479	5.4

(38) 読売新聞取材班『わいせつ教員の闇—教育現場で何が起きているのか—』（中公新書ラクレ、2022 年）。

(39) 児美川孝一郎、前川喜平前掲書、「6 教員政策と教職のゆくえ」 pp.129-152。

(40) 広田照幸『教育改革のやめ方』（岩波書店、2019 年） p.viii。

(41) 川口敏明編、前掲書、 p.201。

(42) 一般にも広く読まれた書物として福田誠治著『競争やめたら学力世界一〜フィンランド教育の成功〜』（朝日選書、2006 年）。

Songs from Musicals for EFL Classes

Walter Kurt KLINGER

This article introduces some songs from stage and film musicals, and discusses how they can be used productively in EFL (English as a Foreign Language) classes.

1.1 Why Songs from Musical for EFL Classes?

The musical is one of the USA's most successful art forms, with many of its melodies, if not the lyrics, known and beloved by people around the world. Popular musicals have emerged from the UK as well. EFL students can increase their cultural awareness and appreciation by learning something about the talented composers, writers, singers, musicians, and everyone else involved in such stage and film productions. Furthermore, just as students of Japanese as a Foreign or Second Language ought to learn something about cultural treasures like haiku, origami, bunraku, Ghibli anime, Kurosawa films, Buddhist temple gardens, etcetera, etcetera, so EFL students really should know something about stage and film songs in their target language.

Readers of the *Osaka College of Music Research Bulletin* will need little persuasion to agree to the value of using music in education. The Austin Center for Educator Development in Fine Arts (c2010) provides comments on academic articles about music in various fields of learning. Rieb & Cohen (2008) report on research studies on how chants and songs help in learning the prosodic features of a language, such as rhythm, stress points, and intonation patterns. Salcedo (2010) reports on studies that show melodic text being the easiest to remember, followed by rhyming text, followed by spoken text. Kampa (2014:67) reports that the top "Perceptions of the Effectiveness of Chants / Songs", in her survey of 19 native Japanese and 45 native English-speaking teachers of children in Japan, were "1. Reinforce Natural Rhythm. 2. Fun, Happy Environment. 3. Song Sticks in Head. 4. Feel Part of Class. 5. Easy to

Repeat. 6. English Fluency. 7. Build Pronunciation Skills. 8. Motivating for Students. and 9. Build Student Confidence.”

In stand-alone songs, the meaning of the lyrics is often difficult to understand, especially when they express the author’s personal thoughts and feelings, and the words are sometimes difficult to catch; one amusing example is when Whoopi Goldberg’s character in the movie **Jumpin’ Jack Flash** (1986) cries out, “*Mick! Mick! Speak English!*” when she can’t figure out what words Mick Jagger is singing (“*I was born in a cross-fire hurricane.*”). Songs in musicals, on the other hand, are typically sung out loud and clear, are often slower than usual speech, their meanings are usually easy to understand as they relate to the storyline, and their grammar and vocabulary are fairly simple and straight-forward. These points make them ideal EFL classroom material.

1.2 Rhymes in Songs

An aspect of English songs that many educators believe helps children learn language is the repetition: in refrains, in repeated phrases, and in repeated sounds in rhyming words (Kampa 2014:19).

Words that rhyme have a repetition of the same or a similar sound, typically in their final syllable or syllables. The repeating pattern of rhyming words is a kind of wordplay, and as such is aesthetically appealing and pleasant to hear. Rhymes are found widely throughout English literature, from nursery rhymes and clapping songs to Broadway show tunes and rap music, and from nonsense verse and limericks to Shakespeare and love poetry. Rhymes are spoken, that is, they are not necessarily decided by spelling. For example, *said* does not rhyme with *paid* but it does with *bed*. Understanding and knowledge of rhyming words and their letter patterns can help students learn pronunciation and spelling (Klinger 2015).

In this article, I would like to postulate that an important way that songs can help in EFL learning is by paying special attention to rhymes and their spelling and pronunciation. In class, I have given short tests about song lyrics studied earlier that have blanked-out words for students to fill in with the rhyming words (cloze tests). The problem is that when I announce the style of the test beforehand, students study and do well on the test. If I don’t announce the test beforehand, the students do relatively poorly. Neither way proves any benefit or demerit about learning with rhymes. I would further need to compare such tests with rhyming songs and tests with regular prose

sentences from, say, speeches or conversation dialogue scripts.

I would hypothesize that native English speakers, who have heard rhymes in poems and songs all their lives, would do better on a cloze test with rhyming words than Japanese EFL students, because there is no tradition of rhymes in poetry or song in the Japanese language.⁽¹⁾ When I asked students in my OCM classes about this, they said that they thought they would not necessarily get better test results with rhymes compared with non-rhyming prose because they don't have the tradition or habit of noticing rhymes.

We can however say with confidence that repeated listening and attempts at speaking using any kind of material will improve pronunciation and prosodic skills. Iba (1998) found that Japanese college students who listened to native speakers reading a nursery rhyme improved their prosody. In my classes I regularly ask students to read aloud song lyrics, dialogues from TV skits and movie scenes, and conversational sentences that they have written, and help them with pronunciation problems.

1.3 Classroom Procedure

The overarching theme to the selection of songs I use in my classes is that they are songs that I like and that I find from experience students also enjoy. This is surely a critical factor in effective lessons, that the teacher enjoys using the material! I often play a song or two to fill some remaining class time or to start a class with a cheerful melody before going to the more sober business of input and output of grammatically sound sentences. First I tell the students a little about the history and the storyline of a particular musical, with photos and a movie preview if available. Next I show song lyrics to which I have added glosses or translations for vocabulary that might be new to the students and in which I have also highlighted in different colors the rhyming words. I read the lyrics aloud, pointing out and discussing the rhymes, or play a recording of the song. I then play video clips, often including some spoken dialogue before and after the songs to help set the scene. If the video clip has Japanese subtitles, I might play that first, followed by showing the written lyrics, and next followed by a clip with English subtitles. I put all these bits into PowerPoint files to easily show it all on a TV

monitor or projector.

2.1 Songs from Annie Get Your Gun

At the start of the school year, I like to present two songs from **Annie Get Your Gun** (stage 1946, movie 1950), by Irving Berlin (1888-1989), one of America's most prolific tunesmiths with over 1500 songs to his credit. The story is based on real-life Annie Oakley (1860–1926) and her adventures in the American Old West. In *I've Got the Sun in the Morning*, Annie says that she has no money, but that's OK because "I got the sun in the morning and the moon at night." At the end of the song, she pronounces this line "su-nin the mor-nin and the moo-nin the eve-nin," which students find quite amusing.

Annie rhymes *pearl* with *girl*, providing a good opportunity to look at words with the same /ɜː/ or /ɚ/ vowel sound (the "open-mid central unrounded vowel") but spelled with *-ear, *-er, *-ir, *-ur, *-ure, *-or, *-our, or *-ar, as in:

pearl-early-earth-heard-learn-search,
her-were-better-later-never-paper-serve-verb-certain-person,
girl-bird-shirt-stir-sir-circle-first-third-thirty-birthday,
fur-occur-burn-return-hurt-hurry-nurse-murder-urban-Thursday,
nature-picture-pressure-measure-furniture,
word-world-work-worry-favorite-visitor-doctor-effort,
courage-glamour-journey-journal,
grammar-dollar-sugar-solar-similar-popular-forward.

When Annie rhymes *yacht* with *got*, we can look at other same rhymes spelled with either *-acht, *-ot, *-ought, *-aught, *-aut, or *-at(t), such as: *yacht-got-not-knot-plot-bought-thought-taught-caught-astronaut-swat-squat-kilowatt*. I always apologize for strange English spelling, and tell students they just have to learn the spelling and the pronunciation when they learn the word, as English speakers do. Other rhymes in this song are *satisfied-side*, *day-way*, *banks-thanks*, *night-right*, *gold-sold*, and *kin-in*.

In *Anything You Can Do*, Annie and Frank have a competition involving abilities such as "Any note you can reach, I can go higher", "Any note you can hold, I can hold longer", and "Anything you say, I can say faster". Students always laugh when

they hear the teacher trying these abilities. As such, it is a good ice-breaker for the first day of class. In this song we hear rhymes of *greater-later*, *partridge-cartridge*, *sparrow-arrow*, *that-rat*, *liquor-flicker-quicker-sicker*, *caught-thought*, *hurdle-girdle*, *sweater-better*, and *pie-I*. The repetitions of *anything* also provide a chance to practice saying the soft *th* sound.

For these two songs from **Annie Get Your Gun**, I play selections from the 1946 Broadway cast audio recording starring Ethel Merman (1908-1984); for all the other songs from other musicals, I show video clips. Merman sang out in a loud, powerful voice; she is not in the 1950 movie version and its songs are comparatively listless.

2.2 Songs from Oklahoma!

I next introduce five songs from **Oklahoma!** (stage 1943, movie 1955), with lyrics by Oscar Hammerstein II (1895-1960) and music by Richard Rodgers (1902-1979), who also composed **The Sound of Music** (stage 1959, film 1965). I'd say pretty well everyone in English-speaking countries is familiar with at least some of these songs, and the musical is a staple of high school stage productions. The story takes place about 1907 when the Indian Territory and other land north of Texas became a new state of the USA. As the movie opens, Curly is on his way to invite Laurey to the community dance party later that same day. He sings *Oh, What a Beautiful Morning*, rhyming *high-eye-sky*, *day-way*, and *tree-me*, with a pleasing blue note on "morning." In *The Surrey With the Fringe On Top*, he rhymes:

top-pop-swap-hop-stop-plop-clop, *surrey-scurry-flurry-blurry-hurry*,
leather-heather-weather-together, *winkin'-blinkin'-thinkin'*, *sleepin'-keepin'-*
creepin', *flutters-strutters-shutters*, *me-be-see*, *brown-down*, *silk-milk*, *along-song*,
clover-over, *older-shoulder*, *hill-still*, and *header-meader*.

In the songs and spoken dialogue in this movie, we often hear non-standard grammar and pronunciation like *a elephant* and *a old* instead of the usual *an elephant* and *an old*, *it don't* instead of the grammatically correct *it doesn't*, *knowed* instead of *knew*, *heared* instead of *heard*, "if I wasn't" instead of "if I weren't", and double negatives as in "nor none a'ya kinfolk" and "wouldn't have no other kind but silk".

We also often hear *ain't*, a quite useful, all-mighty word which can mean *am not*,

aren't, or *isn't*, or *haven't* or *hasn't*, as in: “*Ain't thought much about it yet*”, “*Ain't no finer rig*”, “*No, I ain't*”, “*It ain't too early and it ain't too late*”. Using *ain't* has always been completely unacceptable in schools and in the business world, but you quite often hear it in songs, no doubt because its sound and syllabic timing often fit the song better than the grammatically prescribed forms would.

When we hear people in this movie say and sing things that we might label as bad grammar or at least not usually acceptable, we understand that these people didn't have much school education where the use of improper grammar would surely have been stamped out of their mouths and minds. Actually, there doesn't seem to be a schoolteacher or any mention of a school at all in the movie. (There are no black or Native Americans characters, either; though that is not unexpected as American society until the mid-1960s or later was largely segregated.)

Some instances of pronunciation we hear in the movie are quite acceptable as regional or social variants. Curly says *willer* for *willow*, *yeller* for *yellow*, and *medder* for *meadow* (he sometimes says *meadow*, but *medder* makes a nice rhyme with *header*). Another character similarly pronounces *potatoes* as *pertaters* and *tomatoes* as *termayters*. Sometimes the “r” is taken out rather than added, as in *gal* (=girl). We also hear vowel changes often heard in the southern USA in *gittin'* for *getting* and *git ya ta set* for *get you to sit*.⁽²⁾

We often hear common reduced forms like *ya* for *you*, *ta* for *to* (“*Who ya takin' to the Box Social? Bet ya come over ta ask Laurey!*”), *whattaya* for *what are you*, *a'* for *of* (“*the fringe was made a' silk*”), *y'r* for *your* or *you're*, and *muh* for *my*. *And* is reduced to *'n'* in “*cats 'n' dogs'll dance in the heather; birds 'n' frogs'll sing all together*”. *Would* is reduced to *'ud* in “*and 'ud never stop*”.

An interesting contraction is unstressed *c'n* for *can*, which indicates that *can* is not the most important word in the message: “*you c'n tell 'em that*”, “*ya c'n roll right down*”, “*you c'n keep y'r rig, if y'r thinkin'*”, “*I c'n see the stars gittin' blurry*”, “*ya c'n turn the radiator on*”, “*an' the wavin' wheat c'n sure smell sweet*”.

In *Everything's Up-to-Date in Kansas City*, we notice how the singer says *fer* for *far* (“*They've gone about as fer as they c'n go*”), *'n' 'en* for *and then*, and *Ah* for *I* (“*N*

'en Ah put muh ear to a Bell Tellyphone”), *modrun* for *modern*, and *larned* for *learned*. We hear the rhymes *go-grow-show-below*, *heel-feel-real*, *heat-complete-feet*, *Frid'y-idee*, *two-to*, and *walk-talk*. The song features energetic tap-dancing and a great lasso stunt.

Laurey and her girl-friends dance a ballet as they sing ***Many A New Day***. Here we find nice pronunciation practice with “*never've I*” as a contraction of “*never have I*”, and nice rhymes in *eye-sigh-fly-sky-rye-guy*, *honeybee-me-he-tea*, *care-wear-hair*, *cajoled-consoled-doled*, *strong-wrong*, *away-say*, *men-again*, *bygone-gone*, and *blue-do*.

Oklahoma!, the last song in the movie,⁽³⁾ rhymes *late-state-great*, *life-wife*, *pertaters-termaters*, *zoom-room*, *rope-hope*, *plain-rain*, *wheat-sweet*, *I-sky*, *talk-hawk*, and *land-grand*. *O-O-O-O-Oklahoma* is amusingly stretched out, and there is a nice word play in “*You're doin' fine, Oklahoma! Oklahoma, O.K.!*”

2.3 Songs from Oliver!

I next introduce two songs from another exuberantly-titled musical, ***Oliver!*** (stage 1960, movie 1968), with book, music & lyrics by Lionel Bart (1930-1999), based on ***Oliver Twist***, director David Lean's 1948 film drama adaptation of Charles Dickens' classic 1838 novel. Nine-year old orphan Oliver is thrown out of the workhouse for daring to ask for more food. He meets a boy who invites him to stay where he lives with other boys and a “respectable old gentleman.” We are taken on a dazzling tour of Victorian London street scenes as we hear these rhymes in ***Consider Yourself at Home***: *spare-cares-share*, *strong-along*, *grouse-house*, *mate-state*, *fuss-us*, *all-call*, and *uppity-cup a' tea*. In ***I'd Do Anything for You***, we hear rhymes of *you-shoe-blue-kangaroo-Timbuctoo*, *hill-will-daffodil-Bill*, and *shop-drop-pop-plop*, while the many repetitions of *anything* are again good practice for a sound many Japanese students have difficulty in pronouncing. The Osaka College of Music students greatly enjoyed watching videos of cast interviews and a rollicking performance of 仲良くしようぜ (***Consider Yourself***) from a 2021 Japanese stage production.

2.4 Songs from The King & I

Next I introduce three songs from ***The King & I*** (stage 1951, movie 1956) again by Rodgers & Hammerstein (R&H). The story is based on the memoirs of Anna Leonowens, an Anglo-Indian woman who was schoolteacher to the children of Mongkut,

the monarch of Siam, for five years in the 1870s. When R&H's Anna first arrives in Bangkok, she advises her son to *Whistle a Happy Tune* if he is ever frightened, rhyming *erect-suspect*, *pose-knows*, *tell-well*, and *far-are*. In the classroom in the palace, she and the children sing and dance to *Getting to Know You*, making rhymes of *thought-taught*, *boast-most*, *nicely-precisely*, *me-tea*, and *easy-breezy*. The King and Anna together perform *Shall We Dance*, a very well-known song indeed (to paraphrase Anna), rhyming *side-occupied*, and *dance-perchance-romance*. **The King and I** (2015), is an R&H stage revival starring Kelli O'Hara as Anna and well-known Japanese actor Ken Watanabe as the King; students pay close attention when Watanabe speaks and sings in English.⁽⁴⁾

2.5 Songs from Grease

Grease (1978, starring John Travolta & Olivia Newton-John), is based on the 1971 stage musical by Jim Jacobs & Warren Casey. Teenagers Sandy and Danny meet on a California beach in the summer of 1958 and fall in love. Sandy is sad that she has to go back to Australia, but Sandy's father's job suddenly changes so she stays in California and starts school at a local high school. In *Summer Nights*, she tells her new classmates about the boy she met in the summer, while Danny in the same school tells his pals about the girl he met. The song has many fun rhyming words: *blast-fast*, *me-be*, *days-away*, *far-car*, *cramp-damp*, *drowned-around*, *sun-begun*, *sight-fight*, *bowling-strolling*, *arcade-lemonade*, "made out"-*stayed out*", *dock-o'clock*, *fling-thing*, *brag-drag*, *hand-sand*, *sweet-heat-meet*, *eighteen-mean*, *spend-friend*, *colder-"told her"*, *ends-friends*, *vow-now*, and *dreams-seams*.

Sandy and Danny soon find out that they are in the same school, but they have some misunderstandings and break up. Danny is a bad-boy punk while Sandy is pure and sweet like a Disney Princess. Sandy sings *Hopelessly Devoted to You* about how she misses Danny, rhyming *you-do* and *hide-aside*. At the end of the movie, Danny, missing Sandy, decides to change his style from leather jacket to sportsman cardigan so that he can be with her, but then sees that Sandy also changed her style so she could be with him. Their song, *You're The One That I Want*, has a line that is quite difficult to catch, even for fluent English speakers, but is great fun to try to say as quickly as it

is sung in the movie: “*You’re the one that I want. You are the one I want.*” We hear rhymes of *multiplying-supplying-electrifying*, *man-understand*, *you-true*, *affection-direction*, *convey-way*, and *satisfied-justified*. In the re-make **Grease Live!** (2016), the camera follows the story live in various locations in front of cheering spectators.

After these songs from 5 musicals, I introduce some of the following songs according to available time and students’ interests.

2.6 Songs by Liza Minnelli

The film **Cabaret** (1972) is based on the 1966 stage show with music by John Kander and lyrics by Fred Ebb, who also composed the musical **Chicago** (stage 1975, movie 2002). Liza Minnelli stars as Sally Bowles, a singer at the Kit-Kat cabaret club in Berlin, Germany, in about 1931. Inflation is sky-high; no one has money. The Nazis are menacing and becoming powerful. In *Farewell Mein Lieber Herr*, Sally rhymes *am-lamb-jam*, *do-through-toodeloo*, *affair-care-air*, *eye-why*, *brow-now*, *wide-side-tried*, and *can-man*. In *Maybe This Time (I’ll Be Lucky)* she rhymes *stay-away*, *fast-last*, *anymore-before*, *me-be*, and *begin-win*. In *Money, Money, Money (Makes the World Go Round)*, a lively song students always enjoy, Sally and the MC of the club rhyme *round-pound-sound*, *escapade-maid*, *lot-yacht*, *sure-poor*, *fate-underweight*, and *evermore-door*. In *Come to the Cabaret*, Sally rhymes *play-cabaret-holiday-away-day-say-play-stay*, *room-broom-doom-tomb*, *celebrating-waiting*, *Elsie-Chelsea*, *flower-hour*, *snicker-liquor*, and *queen-seen*.

Minnelli co-starred with Robert DeNiro in **New York, New York** (1977) and sang its theme song, *New York, New York (Start Spreading the News)*, also by Kander & Ebb, which became one of both her and Frank Sinatra’s signature songs, in which we hear rhymes of *news-shoes*, *today-stray*, *sleep-heap*, and *there-anywhere*.

2.7 Songs by Judy Garland

Minnelli is the daughter of Judy Garland (1922-1969), who is perhaps most celebrated for her role as Dorothy in **The Wizard of Oz** (1939). Dorothy’s song, *Somewhere Over The Rainbow*, by Harold Arlen & E.Y. Harburg, is always rated at the top, or near the very top, of any list of favorite or best movie songs (e.g., American Film Institute 2004), and in which we hear the rhymes *high-lullaby-fly-I*, *blue-true*, and

drops-tops.

Another classic by Garland is *The Man That Got Away*, by Harold Arlen & Ira Gershwin, from **A Star Is Born** (1954), where we hear the rhymes *bitter-glitter*, *colder-older*, *away-astray-day*, “*won you*”-“*undone you*”, *beginning-inning*, *game-same*, *thrill-mill*, “*on to*”-“*gone to*”, *rougher-tougher*, “*burn up*”-“*turn up*”-“*let up*”, and *began-than*. The Japanese subtitles unfortunately miss the point of the phrase “a one-man woman”, whose appearance in the lyrics startles and intrigues students; in the story it clearly means that the singer loves only one man.

2.8 Songs by Fred Astaire

Garland co-stars with probably the best dancer in American cinema, Fred Astaire (1899-1987), in **Easter Parade** (1948; songs by Irving Berlin), where they rhyme *there-fare*, *collar-holler*, *train-again-remain*, and *bells-yells* in *The Midnight Choo-Choo*. The Japanese subtitles misinterpret the idiom “with bells” in “*I will be right there with bells*” as referring to train bells, when a more accurate translation is 喜び勇んで、早速. In *Steppin’ Out (With My Baby)*, Astaire rhymes *baby-maybe*, *scintillate-date*, *of-love*, *time-sublime*, *right-tonight*, *honey-sunny*, *good-wood*, and *sails-nails*. The Japanese captions ignore the nuance of “stepping out” which means “to go out for an evening of entertainment, typically dressed up fashionably.”

Often considered as the best of the 9 movie musicals Fred Astaire & Ginger Rogers (1911-1995) made together, **Top Hat** (1935) features 8 Irving Berlin tunes, of which I like to present 3 in my classes. Astaire plays tap dancer Jerry, who falls in love with fashion model Dale, played by Rogers. Dale mistakenly thinks Jerry is Horace, who is Jerry’s manager and the husband of her friend Madge, so she feels uncomfortable and angry because Jerry keeps chasing her, though she has fallen in love with him as well.

In *Isn’t This A Lovely Day (To Be Caught In The Rain)*, Astaire rhymes *frightening-lightning*, *way-day-say-OK-gray*, *weather-together*, *rain-remain*, *sea-me*, *high-I*, *storm-warm*, and *patter-matter*. In *(When We’re Out Together Dancing) Cheek To Cheek*, which never fails to charm students, he rhymes *speak-see-cheek-week-streak-peak-creek* and *you-to*. In *Top Hat, White Tie, and Tails*, he rhymes *mails-*

tails-sails-nails and *class-gas*.

A stage version of **Top Hat** appeared at long last in 2011, with 6 additional Berlin songs. The Takarazuka Revue released a 2015 Japanese-language DVD of the 宙組 *Soragumi* Cosmos Troupe's performance, and a 2022 Blu-ray of the 花組 *Hanagumi* Flower Troupe's performance, clips of which thrilled those OCM students who were fans of the Revue.

2.9 Songs by Gene Kelly

Gene Kelly (1912-1996), probably the second-best male dancer in American films, rhymes *rain-again-lane-refrain*, *above-love*, and *chase-place-face* in the well-known, cheerful title song, by Arthur Freed & Nacio Herb Brown, of the 1951 movie, **Singin' In The Rain**. Kelly joins Frank Sinatra and Jules Munshin in singing ***New York, New York (A Wonderful Town)*** in **On The Town** (stage 1944, movie 1949), with music by Leonard Bernstein, best known for composing **West Side Story**, and lyrics by Betty Comden & Adolph Green, rhyming *town-down-ground*, *many-any*, *say-day-bay-Mandalay-way*, *over-Dover*, *sight-light*, *satin-Manhattan*, and *date-eight*, as we are taken along on a sightseeing tour of the wonderful town (the original stage show had it as *New York, New York, a helluva town*).

2.10 Songs by Marilyn Monroe

In the film **Gentlemen Prefer Blondes** (1953, music by Jule Styne and lyrics by Leo Robin), Marilyn Monroe (1926-1962), who remains even today a major icon of American pop culture, makes clever rhymes in ***Diamonds Are A Girl's Best Friend*** with *duels-jewels*, *lives-gives*, *continental-rental*, *flat-automat*, *cold-old*, *end-friend-descend*, *lawyer-employer*, *nice-ice-dice*, *guy-high*, *louses-spouses*, *platonic-Masonic*, *bets-pets-begets*, *on-gone*, and *knees-Tiffany's*. In what is often ranked the best American comedy film, **Some Like It Hot** (1959), Monroe sings ***I Wanna Be Loved by You***, rhyming *aspire-higher-desire*, and ***I'm Through With Love***, rhyming *fall-call*, *there-air-care-share-swear*, *lead-need*, *around-hound*, *emotion-devotion*, *spring-bring*, and *me-be*.

2.11 Songs from The Rocky Horror Picture Show

In **The Rocky Horror Picture Show** (stage 1973, movie 1975; songs by Richard

O'Brien) we hear rhymes of *again-insane*, *right-tight*, *dreamy-free me*-"see me", *dimension-intention*, *flip-slip*, *sensation-sedation*, *think-wink*, *surprise-eyes*, and *lab-slab* in *Let's Do the The Time Warp Again*, and rhymes of *handyman-candyman*, *cover-lover*, *around-sound*, *groovy-movie*, *visual-abysmal*, *hurry-worry*, *are-car*, *flat-that*, *panic-mechanic*, and *night-right-bite* in *I'm Just a Sweet Transvestite*, an exuberantly-performed song that wins applause from students.

2.12 Songs from Dreamgirls

Dreamgirls (movie 2006, based on the 1981 stage show with music by Tom Eyen & Henry Krieger) is reminiscent of the biography of the 1960s Motown singing trio, the Supremes. Jennifer Hudson as the Florence Ballard character rhymes *know-go*, *free-me*, *goin'-showin'*, *time-mind*, *share-there*, *shout-out*, and *kill-will* in *And I Am Telling You (I'm Not Goin')*, and *can-am*, *understand-hand*, *clear-here*, *alone-known*, *find-blind*, *fine-time*, and *now-how-vow* in *I am Changing*. Beyoncé as the Diana Ross character rhymes *complete-release*, *home-known-own*, and *heard-worse* in *Listen*.

2.13 Songs from Gypsy

Gypsy, with music again by Jule Styne (1905-1994, also famous for *Funny Girl*) and lyrics by Stephen Sondheim (1930-2021, a towering figure in musical theater), is based on striptease artist Gypsy Rose Lee (1911-1970)'s memoir about her mother pushing her and her sister to succeed in show business. Opening on Broadway in 1959 starring Ethel Merman, it is often acclaimed as the greatest American musical; it certainly has many dazzling rhymes. In the classroom, I show clips from Bette Midler's 1993 movie version. *Some People* rhymes *thrill-still*, *alive-thrive-five*, *bloom-room*, *play-say-way*, *content-rent*, *be-me*, *circuit-work it*, "jig time"-*big time*, "had to go to"-*said hello to*, *butts-guts*, and *suppose-Rose*. *Everything's Coming Up Roses* rhymes *you-true-through-due*, *great-plate-wait*, *tracks-relax*, *inning-beginning*, "can do it"-*see to it*, *lights-heights*, *tell-bell*, and *see-me*. *Together (Wherever We Go)* rhymes *far-star*, "he goes"-*she goes*-*egos-amigos*, *thin-in*, *show-go*, *you-through-do*, *sleep-steep*, "I row"-*you row*-"a duo"-*I hoe*-"you hoe"-*a trio*-"I owe"-*you owe*-"me owe"-*we owe*, *bow-cow*, *verve-nerve*, *group-troupe-soup*, and *threes-Louise*. *You Gotta Have a Gimmick* rhymes "stops out"-*cops out*, *sacrow-back row*, *bump-dump*, *dead-*

ahead, horn-born, schlepper-Mazeppa, dance-chance, rich-switch, electrifying-“even trying”, paid-made, success-finesse, “Tessie Tura”-“more demurer”, mimic-gimmick, “make it”-“shake it”, “grind it”-“refined it”, “stump it”-trumpet, and cigar-are-star. Rose’s Turn rhymes pay-away, “have it”-“had it”, hallelujah-“show it to ya”, and me-Lee.

2.14 Songs by Elvis Presley

Elvis Presley (1935-1977) starred in 31 comedy-romance-musical films between 1956 and 1969, which produced a handful of memorable songs. The title song of **Love Me Tender** (1956), with the melody of an 1861 ballad, *Aura Lea*, rhymes *go-so, fulfilled-will, dear-years, and mine-time*. The title song of **Jailhouse Rock** (1957) rhymes *jail-wail, swing-sing, rock-block, saxophone-trombone, bang-gang, see-me, stone-alone, square-chair, sake-break, and nix-kicks*. The title song of **King Creole** (1958) rhymes *roll-soul-coal-creole-pole, done-gun, throat-wrote, hole-roll, greens-Orleans, and sweet-feet*. The title song of **G.I. Blues** (1960) rhymes *Rhine-time, blues-shoes-fuse, chow-cow, march-arch, and pass-grass*. *Can’t Help Falling in Love* from **Blue Hawaii** (1961), with the melody of a 1784 French ballad, *Plaisir d’amour*, rhymes *sea-be, and too-you*. *Return to Sender* from **Girls! Girls! Girls!** (1962) rhymes *sack-back-spat, unknown-zone, “Special D”-me, and hand-understand*. The title song of **Viva Las Vegas** (1964) rhymes *fire-higher, there-care-spare, day-away, wheel-deal-steel, flashing-crashing, drain-again, run-fun, dime-time, and got-hot-shot*. *Come On Everybody* from the same flick cleverly rhymes *Bach-rock (“Well, there ain’t nothing wrong with the long-haired music like Brahms, Beethoven and Bach. Well, I was raised with a guitar in my hand and I was born to rock.”)*

2.15 Songs from Frozen

The songs in **Frozen** (movie 2013; music & lyrics by Robert Lopez & Kristen Anderson-Lopez) are known to pretty well all students; many can sing along at least a little in English. *Do You Want to Build a Snowman* rhymes *play-away, why-bye, halls-walls, been-in, and you-do*. *For the First Time in Forever* rhymes *door-more, plates-gates, halls-balls, strange-change, light-night, zone-alone, all-wall, grace-face, there-fair, bizarre-far, fun-someone, romance-chance, see-be, conceal-feel, show-know-*

tomorrow, *wait-gate*, and *today-way*. ***Love Is an Open Door*** rhymes *face-place*, *you-fondue*, *before-door-anymore*, and *synchronization-explanation*. ***Let It Go*** rhymes *seen-queen*, *inside-tried*, *see-be-me-free*, *know-go*, *anymore-door*, *say-anyway-day*, *small-all*, *do-through*, *ground-around*, *blast-past*, and *dawn-gone*.

In Summer rhymes *buzz-fuzz*, *hand-sand-tanned*, *see-breeze-me-be*, *storm-warm*, *intense-sense*, *cuddle-“Happy Snowman”*, *dream-steam*, and *blue-too-do*. The anomaly of *cuddle-“Happy Snowman”* comes about because snowman Olaf doesn't realize that he will melt in the summer. As he skips along singing “*Winter’s a good time to stay in and cuddle, but put me in summer and I’ll be a...*”, he comes to a puddle 水たまり. He pauses and looks down at it with a gasp. We expect he will finish “*I’ll be a...*” with *puddle*, as *puddle* rhymes with *cuddle*, but instead he says “*I’ll be a Happy Snowman*” as he merrily jumps over the puddle, oblivious to his fate. It is a really terrific “missing rhyme” joke. ***True True Love*** rhymes *walks-talks*, *feet-sweet*, *flaws-laws*, “*brain, deer*”-*reindeer*, *of-love-shove*, *scared-impaired*, *woods-goods*, *fondness-blondness*, *bugs-hugs*, *isolation-confirmation-desperation*, *do-you*, *thing-ring*, *engagement-arrangement*, *betwixt-fixed*, *change-strange*, *stressed-best*, *about-out*, and *brother-“each other”*.

2.16 Songs from Snow White

Snow White & The 7 Dwarfs (1937; lyrics by Larry Morey and music by Frank Churchill; featuring the voice of Adriana Caselotti as Snow White) has some 30 minutes of great songs in its 83-minute run-time that many students are familiar with. ***I’m Wishing / One Song*** rhymes *do-true-you-through*, *today-say*, and *beating-entreating*. ***Whistle While You Work*** rhymes *place-pace*, *room-broom-tune*, and *high-fly*. ***Dig Dig Dig / Heigh-Ho*** rhymes *through-do*, *quick-pick*, *mine-shine*, *night-sight*, *score-more-for*, and *ho-go*. ***The Washing Song*** rhymes *disgrace-place-face*, *bluff-enough-snuff*, *douse-souse*, *rub-scrub-tub*, *done-fun*, *trick-slick-sick*, and *denied-dried-hide*. ***The Silly Song*** rhymes *rhythm-“with ‘em”*, *thing-sing*, *tree-me*, and *limb-him*. ***Someday My Prince Will Come*** rhymes *go-know*, *anew-true*, and *sing-ring*.

2.17 Future Projects

I hope to prepare more lesson material from other musicals, particularly songs

from **Guys & Dolls** (1955), **West Side Story** (1961, 2021), **The Music Man** (1962), **My Fair Lady** (1964), **Mary Poppins** (1964), **The Sound of Music** (1965), **A Chorus Line** (1975), **Hair** (1979), **Les Misérables** (2012), selections from Barbra Streisand's half-dozen musical films, a few Andrew Lloyd Weber and Tim Rice compositions, and a couple of songs from **The Gershwins' Porgy and Bess** (2020; a musical theater adaptation of the 1935 opera).

3 Conclusion

Everyone likes music, and EFL students are often especially keen to learn songs that are popular in English-speaking countries. I find that using songs in the classroom is thus a fairly painless way to point out a little sentence structure, spelling, vocabulary, and pronunciation, with the learning hopefully further enhanced as rhyming words are noticed. At the least, I hope that I can convince students about how very enjoyable song rhymes can be, and that they will continue to notice rhymes whenever they encounter English songs.

Footnotes:

(1) Tsujimura and Davis (2009) report on the use of rhyme in recent Japanese hip-hop songs, giving examples like *juudaiga-juutaida*, *monodooshi-morochooshi*, *motsubekida-totsugekida*, *yookosoo-kyookoso*, *daichio-akaichio*. OCM students tell me that Japanese hip-hop is typically sung very fast and they cannot catch, let alone remember, the rhymes.

(2) Some speakers of English dialects especially in the American South can't hear any difference between words like *pen* and *pin*. I always point out to students that you could say "the American South" or "the southern USA" or "the southern states" or "the South." You cannot say "South America" – that's a completely different place, a continent, actually - or "southern America" – which has no meaning at all. When you are inside the USA, or outside the USA and after you have established that you are talking about the USA, you can say "America" meaning the USA. In my hometown of Toronto, we would say "the States" when referring to the USA. People in Chile, Brazil, Peru, Argentina, etc., consider themselves to be living in *America*, as they differentiate living in "America" from living in Europe or Asia or Africa.

(3) The storyline doesn't end here though. Next the bad guy tries to kill Laurey and Curly in a fire and then lunges at Curly with a knife, but Curly dodges him and the bad guy dies after somehow managing to fall on his own knife. I tell students it's not really a happy movie to watch but the songs are great. I tell them the same about **Oliver!**, for which I further don't inform students that Oliver's singing voice is not the young actor's own but is dubbed by someone else.

(4) Deborah Kerr's singing as Anna in the R&H film is sung off-camera by Marni Nixon, who also dubbed Natalie Wood's singing in **West Side Story** (1961) and Audrey Hepburn's in **My Fair Lady** (1964), among other usually uncredited performances. The several movie versions of **The King and I** are banned in Thailand for being insulting to the king; for example, for saying that it is Anna who introduces democratic ideas to a

backward country.

References:

- American Film Institute (AFI). 2006. Greatest Movie Musicals of All-Time. <https://www.filmsite.org/afi25musicals.html>
- American Film Institute (AFI). 2004. 100 Years...100 Songs. <https://www.afi.com/afis-100-years-100-songs/>
- Center for Educator Development in Fine Arts (CEDFA), Austin, TX. c2010. Music Experiences. <https://www.cedfa.org/music-experiences>
- Iba, Midori. 1998. The Effect of Nursery Rhymes on Developing the Prosodic Skills of Japanese Students. *Language and Culture: The Journal of the Konan University Institute for Language and Culture*, 2, 23-34.
- Kampa, Kathleen. 2014. Chants and songs in the young learner classroom: a comparison of music use, purpose, and effectiveness from native Japanese speaker and native English speaker perspectives. Thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the Degree of Master of Arts at St. Cloud State University, St. Cloud, Minnesota. 130 pages.
- Klinger, Walter. 2015. (Presentation) Rhymes in “Frozen” (2013). The 13th Annual Conference of ATEM West Japan Branch, 第13回映画英語教育学会 (ATEM) 西日本支部大会, Osaka Institute of Technology Umeda Campus, Nov. 14.
- Klinger, Walter. 2005. Movie Musical Songs for English Language Teaching: “The King & I”. 『映画英語教育研究紀要』第10号, *ATEM Bulletin of Teaching English Through Movies*, No. 10, pp 62-63.
- Klinger, Walter. 2004. (Presentation) English and Culture through Movies: Western and Asian Cultures Meet, and Clash in “The King & I”. The 10th Annual Conference of ATEM, The Association for Teaching English through Movies, Kyoto University of Foreign Languages, Sept. 11.
- Klinger, Walter. 2004. Movie Musical Songs for EFL: Oklahoma! 『映画英語教育研究紀要』第9号, *ATEM Bulletin of Teaching English Through Movies*, No. 9, pp 66-67.
- Klinger, Walter. 2003. (Presentation) Movie Musical Songs for EFL: Oklahoma! The 9th Annual Conference of ATEM, The Association for Teaching English through Movies, Seinan Jo Gakuin University, Kitakyushu, June 3.
- Rieb, Courtney, & Cohen, James. 2020. The Impact of Music on Language Acquisition. *Mid-Western Educational Researcher*, Volume 32, Issue 4, pp 350-368.
- Salcedo, Claudia S. 2010. The Effects of Songs in the Foreign Language Classroom on Text Recall, Delayed Text Recall and Involuntary Mental Rehearsal. *Journal of College Teaching & Learning*, Volume 7, Number 6, pp 19-30.
- Stokes, Juniper. 2008. The Effects of Music on Language Acquisition. *Asia University (亜細亜大学)英語教育研究所紀要 (CELE Journal)*, 16, pp 23-33.
- Tsujimura, N., & Davis, S. 2009. Rhyme and the Reinterpretation of Hip-Hop in Japan. *Global linguistic flows: Hip-Hop cultures, youth identities, and the politics of language*, Alim, H. S., Ibrahim, A., & Pennycook, A. (Eds.), Routledge, pp 157-171.

【研究ノート】

本学のイタリア語学修にみられる問題点

谷口 真生子

1. はじめに

日本では中学校の3年間と、高等学校の3年間で英語を学ぶ。日本語の次に習う外国語は英語である。大学に入学する時は、各学生は既に6年間の英語学習の経験を積んでおり、大学に進学すると、第2外国語と呼ばれる外国語科目を履修することができる。もちろん、英語学習を続けることも可能である。

大学で履修すべき外国語科目については、大学によって言語が様々であるが、一般的には英語、ドイツ語、フランス語、中国語が主要なものである⁽¹⁾。イタリア語はマイナーな言語である。近年、大学における外国語科目に関しては英語に重きが置かれ、他の外国語は軽んじられる傾向にある。大阪音楽大学でも英語を必修外国語科目とする学生が最も多く、次いでドイツ語、イタリア語、フランス語と続く⁽²⁾。

イタリア語は大学で音楽を学ぶ者にとってはどのような意味を持つものであり、どうあるべきか常に筆者は考えてきた。専門教育科目の外側で、教養教育科目と保健体育科目と位置付けられている外国語科目であるが、音楽系の大学でのイタリア語は、他の分野を学ぶ大学でのイタリア語とは違ったものであるべきではないかと筆者は考えている。本論では、筆者がそう考えるに至った経緯を、イタリア語学修の動機、学生のモチベーションや、学生と教員が持つ問題点を絡めながら辿り、理想的なイタリア語学修についての糸口を考察する。

2. 本学の建学の精神・基本理念と外国語に関連するディプロマ・ポリシー

問題点を提示するために、外国語科目についての本学での捉え方を確認する。

2.1. 建学の精神・基本理念

大阪音楽大学及び大阪音楽大学短期大学部は令和3年度（公財）日本高等教育評価機構により、評価基準に適合しているとの認定を受けた。公益財団法人日本高等教育評価機構評価機構より出された評価報告書⁽³⁾の中で、大阪音楽大学及び大阪音楽大学短期大学部は建学の精神や創設者の持論に基づき、「音楽的技術の修得に留まらず、音楽に関する知識、一般教養、社会人としての自己形成を含めた教育を行う」ことを個性・特色としていると認められている。

建学の精神「世界音楽 並ニ 音楽ニ関連セル諸般ノ芸術ハ之ノ学校ニヨッテ統一サレ 新音楽 新歌劇ノ発生地タランコトヲ祈願スルモノナリ」は、音楽大学を1915年に開学した創設者永井幸次の言葉から受け継がれている。この文言を分かりやすく平易な文章に直し、「世界に広がる音楽文化や関連諸領域を遍く研究し、時代を革新する創造的な音楽の発生地、発信地になること」を建学の精神の趣旨として現在に至っている。

世界に広がる音楽文化や関連諸領域を研究するために、つまり、外国語で書かれている文章を理解したり、必要な外国語でのコミュニケーション力を養うために外国語は必要不可欠なものであり、創造的な音楽の発生や発信に寄与するものであると読み取ることができよう。

2.2. ディプロマ・ポリシー

大阪音楽大学のディプロマ・ポリシーのうちで外国語に関連する記述部分は、主に社会人としての資質に関わる能力・知識等の3項目のうちのひとつを構成しており、「英語の実践的な運用能力、または他の外国語の基礎的な運用能力があり、異文化を理解する姿勢を備えている。」とある。

短期大学部のディプロマ・ポリシーでは「英語の一般的な運用能力、または他の外国語の基礎的な知識があり、文化の多様性を理解する姿勢を備えている。」と表されていて、4年間で学修の大学部と2年間で学修の短期大学部との違いを見せている。

本稿では大学院についてを扱わないが、大学院でのディプロマ・ポリシーでは、「芸術文化に関する幅広い教養と実践的な外国語の運用能力」を明記している。大学院の科目で外国語部会に所属する教員が担当する授業はここ数年はないが、ドイツ語のネイティブの非常勤講師が担当する会話系のクラスが以前開講されていたことがあり、必要に応じては実践的な外国語を学ぶ場が提供可能と言うことであろう⁽⁴⁾。

3. 本学における外国語科目の変遷

既に確認したように、本学の基本理念では、外国語科目の修得は音楽には欠かせないものとなっている。しかしながら、日本全体の、すなわち文部科学省の方針によってその規模や内容を変更せざるを得ない状況となってしまった。イタリア語を中心として外国語科目のその経緯を概観する。

3.1. 外国語教育と大学設置基準の大綱化⁽⁵⁾

大学の外国語科目については、昭和22年制定の大学基準においては、一般教養科目の人文科学系列の一科目とされていて、最低16～24単位の必修と定められていた。3年後の昭和25年の基準改正により、外国語は独立した科目ではなく、補助的なものと位置付けられ、

教養科目から一般教育・専門教育の道具的科目と見做され、大学は2以上の外国語各8単位以上の授業を用意することとなった⁽⁶⁾。大学設置基準が昭和31年に制定され、外国語は科目として独立し、原則として二外国語以上であるが一外国語でも良いとされ、卒業要件は一外国語8単位以上、二外国語以上の場合には、専門教育科目の単位に含めることができることとなった。つまり、当初の、現在の単位数の倍以上が必修である状況が10年ほど続き、大学設置基準が制定されることで大幅に学修時間が減じられたことになる。

この旧大学設置基準では大学全体の授業科目は、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、及び専門教育科目に分けるものと規定されていたが、1991年の大学設置基準の大綱化によって変更され、教育課程の設定方針として、「第十九条 大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目標を達成するために必要な授業科目を自ら開設し、体系的に教育課程を編成するものとする。2 教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」という大学独自の編成を許す、柔軟なものになった。規定に捉われることなく以前よりも自由な科目を作れるという利点がある一方、各大学の理念やポリシーに適合するものにしなければならない訳であった。

外国語教育は大綱化による改革により、単位の減少の加速化や、教育の内容の見直しへと進んでいった。本学では必修科目数の縛りを減らし、選択科目へと転換していった。

問題点は、必修科目の縛りが少なくなり、学生が外国語を学修する時間が減ったことである。イタリア語の学修に割くことができる時間が減ることで、文法を教えることについての余裕が無くなっていった。学修内容の量が減ってしまったのである。文部科学省は大学では英語を推進し、国際社会で実際に使える英語を習得する目指す方針を取っている⁽⁷⁾。音楽を学ぶ大学では一般大学と同様に、その方向に進んで良いものかと考えずにはいられない。

3.2. 外国語科目の単位数について

現在、本学の学部では専門教育科目80単位、一般教育科目21単位、保健体育科目2単位、そして外国語科目8単位を必修単位とし、4年間で合計124単位が卒業に要する単位数である。短期大学部では、専門教育科目38単位、一般教育科目7単位、保健体育科目1単位、外国語科目2単位を必修として、2年間で62単位を取得して卒業となる。

学部での必修外国語科目は1年次に週に2科目を一コマずつで、2年次も同様である。つまり、週に2回の必修外国語の授業を行なっている。短期大学部の必修外国語は1年次に前期1コマ、後期に1コマずつの、週1回の授業をこなせば事足りる。大学では週2回のうちの1回が文法の授業に充てられているが、前期後期で合わせて30回の授業（その中に授業内試験や振り返りの時間が含まれている）を行うが、基礎文法を教え終えるのに2年間はかかってしまう。接続法という複雑な文法事項までは行き着くことができない場合もある。短期大学部の授業では、簡単な内容の教科書を一冊終えることは出来ても、動詞の時制は現在

のみで、過去時制や未来時制についての学修は諦めざるを得ない。

学部の2011年度入学生までは、1、2年次に必修外国語を8単位、2年次から2年間で必修外国語とは別の言語を4単位を取って合計12単位とするか、もしくは、必修外国語と同じ言語の、「外国語専門」という名称の外国語科目を3年次から4単位分を取得して、合計12単位を取得して卒業するという事になっていた。

大阪音楽大学の外国語科目の必修単位数は、2011年度入学生から8単位になった。短期大学部では1年次に週2コマで4単位が必修で2年次では選択科目として週2コマで4単位分を修得することが出来たものが、2011年までには既に必修単位数は2単位のみとなってしまう。文法クラスの前期のイタリア語aⅠ、後期のイタリア語aⅡを修得すればイタリア語学修は終わりとなり、その先の文法事項の学修を望む短期大学生は、2年次に学部のイタリア語AⅢ・AⅣを履修することとなった。

上述したように、2011年度から必修12単位のうちの4単位（必修とは異なる外国語または必修と同一外国語の進んだレベルの科目）を選択科目に移行させ、外国語12単位の縛りを8単位に減じてしまった。初習外国語を修得するには十分とは言えない状況である。

3.3. 2011年の前と後のイタリア語科目について

2011年を境として科目名と授業内容も変更になった。以下、学部を中心に変更部分を記述する。

通年科目で各2単位であったものが、前期科目1単位と後期科目1単位に分けられた。

(2010年度まで → 2011年度以降)

イタリア語Ⅰ → イタリア語AⅠ, イタリア語AⅡ

イタリア語Ⅱ → イタリア語BⅠ, イタリア語BⅡ

イタリア語Ⅲ → イタリア語AⅢ, イタリア語AⅣ

イタリア語Ⅳ → イタリア語BⅢ, イタリア語BⅣ

イタリア語Ⅰとイタリア語Ⅱは1年次に修得すべき科目で、イタリア語Ⅲとイタリア語Ⅳは2年次での必修科目であり、科目名が違っていても、週2回のイタリア語学習というペースで授業が行われた。つまり、週の前半に時間割で設定されたイタリア語Ⅰの授業の続きは、その2日後に設定されたイタリア語Ⅱで行われ（月曜がイタリア語Ⅰなら水曜か木曜にイタリア語Ⅱが時間割に組まれた。）、イタリア語Ⅰからイタリア語Ⅳを履修することで、1年半で文法の教科書1冊を仕上げ、残りの半年が文法を仕上げた後の講読や、会話に近い授業内容であった。他の外国語を履修せずにイタリア語だけで残りの必修4単位を修得する場合は、外国語専門Ⅰ,Ⅱに進むこととなっていた。教員は「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能をうまく組み合わせて授業を進めて行くことを心がけていた。

2011年以降のイタリア語科目はその名称にAとBが加えられたが、Aを文法クラス、Bをコミュニケーション（会話）系のクラスとして、教科書は同一のものではなく、Aでは文法

用の教科書、Bでは会話中心の実践的なイタリア語学習向きの教科書を選んで使用して授業を行うようになっている。つまり、1週間のうちに、文法授業が1コマ、会話系授業が1コマになっているわけで、2011年までの授業内容に比べ、効率が良くないのである。重複した文法内容を繰り返したり、どちらの教科書も扱っていない文法項目が後になって発覚したり、その上、受講している学生たちが、AとBのそれぞれがイタリア語の授業であると認めず、別個の授業であるかのように学修を進めている場合がある。AとB双方で学んだことを合わせて応用力をつけることが出来れば良いのであるが、どうも教員の思惑通りにはいかないところである。

必修科目から外れてしまった外国語専門Ⅰ、Ⅱは応用外国語AⅠ、AⅡ、BⅠ、BⅡに名称が変わり、通年科目から前期・後期科目に分けられた。Aが講読、Bがコミュニケーション系のクラス設定であった。この応用外国語の4科目は2020年度に縮小され、応用外国語Ⅰが前期、応用外国語Ⅱが後期の2科目になった。コミュニケーション系の応用外国語BⅠ、BⅡは、ネイティブ教員が担当する「イタリア語コミュニケーションA・B」に吸収される形となってしまった。

短期大学部も学部に合わせて科目の名称変更があり、2011年度以降の名称はイタリア語aⅠ、aⅡが必修科目で文法中心の授業が行われ、選択科目はbⅠ、bⅡでコミュニケーション系の授業となっている。選択科目は、教職の必修科目である。

3.4. 選択科目としてのイタリア語

3.3.で触れなかったイタリア語科目を簡単に記述しておく。2011年以前にあった2年次から受講可能な必修のイタリア語A・B（2年間で完結の通年科目）は、科目名を「イタリア語CⅠ～CⅣ」に変え、半期科目で2年間で完結の文法とコミュニケーション系を合わせた授業内容になった。必修科目ではなくなったイタリア語科目は、授業を選択する学生数が減少していったため、受講者数が規定より少なくなった場合の開講中止措置が取られたり、2020年度から「速習外国語（イタリア語）Ⅰ・Ⅱ」の一年完結クラスになっている。

選択科目でネイティブ教員が担当する外国語科目の会話のクラスは1990年代には既にあったと記憶している。その頃は学生数も多く、イタリア語を選択する学生たちも多くて、最盛期は1クラスに40人ほどの学生が受講していたが、現在ではイタリア語のネイティブ・スピーカーが担当する「イタリア語コミュニケーションA・B」は、速習外国語と同様に選択する学生数が多くて3～4人という状況で、開講しない年度もある。この状況は英語以外の他の外国語でも同様である。イタリア語コミュニケーションの担当教員に4月の授業開始時点で、今年度は授業が無くなりました、と言わなくて済むためもあるが、2年次のコミュニケーション系の必修科目「イタリア語BⅢ・BⅣ」の授業を同じネイティブ教員が担当している。

4. イタリア語と受講学生たち

大阪音楽大学の外国語科目には英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語があるが、必修外国語としてどれを選ぶのかは入学前に学生が決めることになっている。ここでは、イタリア語を選ぶこととなった動機などを考える。

4.1. イタリア語受講学生の人数

NHK の教育テレビのイタリア語会話の講師の経験もある、静岡文化芸術大学の高田和文名誉教授の論文⁽⁸⁾によると、イタリア語の学習者が増加していったのは、イタリア観光やイタリア料理、ファッション、サッカーなどへの関心が高まっていったことと比例している。筆者はその頃に大学ではなく、社会人対象のイタリア語クラスを担当して教えた経験があるが、受講料が高くても、色々な人が集まり、熱心にイタリア語を吸収しようとしていたのを覚えている。仕事上イタリア語の知識を必要として、簡単な会話から入ろうとする会社員や、高齢でもイタリア語を読みたい気持ちで通い続ける人もいた。イタリア語を学ぶ動機は人それぞれであろう。高田(2005)では、2003-2004年に行った日本国内の大学のイタリア語の受講者数についてのアンケート調査の結果を記述しているが、全国73の大学で、約1万人の大学生がイタリア語を学習していることになっている。概数であると但し書きのあるそのアンケート集計結果の表では、大阪音楽大学では当時220人の学生がイタリア語を履修していることになっている⁽⁹⁾。現在は2クラス合わせて40人程度が2年分と考え、選択科目をとる学生数が一桁とすると、80人ほどであるので、20年足らず前は多くの学生が大阪音楽大学でイタリア語を学修していたわけである。

4.2. 声楽専攻の学生たち

この20年ほどをかけて本学のイタリア語受講学生が半分以下に減ってしまったわけであるが、このことは学生数の減少と大いに関係がある。イタリア語を受講する動機のうち、声楽専攻だから、声楽には必要だから、というものが多いためである⁽¹⁰⁾。他には、パスタが好きだから、いつかイタリアに行きたいから、音の響きが好きだから、音楽に関係しているから、先輩や先生に薦められたからなどが凡庸であるが、イタリア語学修志望の動機である。

声楽専攻の学生が大部分を占めるクラス編成になっているのが事実である。不思議に思われることであるが、オペラや歌曲はイタリア語だけではないのに、声楽専攻の学生はイタリア語に集中してしまうのである。学生から聞いたことがあるが、声楽専攻では、1年次にイタリア歌曲を学ぶことになっている⁽¹¹⁾。そのため、イタリア語に集中するのかわかれる。一方、2年次では日本歌曲とドイツ歌曲を学ぶことになるのであるが、イタリア語を必修科目で履修している学生たちのうちで、2年次に選択科目の速習外国語(ドイツ語)を履修する学生はあまりいないようである。時間割の都合もあるのかもしれないが、何故このような偏りがあるのか、その理由を探っていくことは興味深い課題であるかもしれない。

4.3. 英語嫌い

イタリア語選択の動機としてのところに挙げなかったが、中学高校の時に英語が苦手で、理解できなかったからイタリア語を選んだという場合も多々ある。英語がダメだったからイタリア語を外国語科目として選んだというのは選び方を間違えていると筆者は思う。

イタリア語はインド・ヨーロッパ語族に属する言語で、ラテン語に最も近い言語であろう。英語もインド・ヨーロッパ語族のうちの言語であるので、文法構造や単語も似ている。もちろんイタリア語の方が歴史が古く、それ故、英語よりも複雑で難解である。

英語を6年間かけて学び、大学に進学する学生たちは、ある程度英語の文法力が身につけているとみなされるべきであろう。大学入試に際しては、英語力についても確認されて良い筈である。毎年2月に行われている一般入試では英語が受験科目に入っているが、ところが、その前の秋に実施される推薦型の入試においては英語は課されていない。推薦型入試を経て入学する学生に関してその英語力についてはのちに判明することとなる。本学の英語については1年時からレベル分けをして習熟度別のクラス設定がされているが、ドイツ語、フランス語、イタリア語については初習外国語であってスタートは皆同じであるという理由から、習熟度別はドイツ語とイタリア語については、1年次に学生の受講状況や成績で考慮した上で、2年次からクラス分けをしている。フランス語は受講人数が少ないためにクラス分けができないため、習熟度別クラスを実現できないままである。

英語の話に戻る。英語はゲルマン語派であるが、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語など色々な言語の影響を受けて出来上がった言語である。文の構造や単語はヨーロッパの言語であるがゆえ、イタリア語ともよく似ている。つまり、英語を正しく学んだ上でイタリア語と取り組むと、上手く学修できるということが言える。英語を高校卒業程度の英語力で普通に入学すれば、初習ではあるが、イタリア語にも親しみを覚えて取り組めるというものである。英語を避けたからイタリア語を選んだと言うのは間違った選択であると思う。イタリア語を必修外国語に選んで入学しても、1年後に英語に切り替えると言う学生も毎年数名いるが、英語に変えても外国語の単位が取れないという状況も考えられる。推薦入試では英語が受験科目でないことが悪いと言っているのではなく、高校を卒業したからには、他の外国語を学べるほどの英語の基礎力が養われているものと常に願っている。

4.4. 辞書

外国語学習に辞書は必携であると思う。地道に辞書をひき、単純な頻出単語ほど何度も繰り返し辞書で確かめることが必要であり、例えば、前置詞はそれぞれ20ほどの意味を持つ。授業で学生が、「…の意味は何ですか」と楽して覚えようとするが、簡単に「…です。」と答えるわけにはいかない。

声楽を専攻とする研究者が著した初級者用の参考書⁽¹²⁾があるが、その冒頭部分の「本書の構成と特徴」にて次の注意点が挙げられている。

辞書を使いこなすことが、語学の力をつける早道です。練習問題を解くときには、辞書を徹底活用しましょう。

全く同感である。学生に年度の初めに授業で日本で出版されている伊和辞典を紹介するが、全員が辞書を揃えるわけでもなく、ましてや短期大学の学生たちは1年間で、週に一度、全30回の授業のために辞書を購入するのに躊躇しているのが実状である。

高校時に英語の辞書を使ったことがない学生がいたり、アルファベットの順番がわからず、なかなか辞書で単語を探せない学生もいる。逆に、辞書の使い方によく慣れていて、放っておいても勝手に勉強する学生もいる。

辞書が必携であるのは、イタリア語は特に動詞の形一法と時制一が変化に富んでいて、見出し語に載っていないなくても、動詞活用表を探せば発見できる語がたくさんあるからである。名詞も馬鹿にならない。語尾変化に悩まされること然りである。辞書を買ったからといってそのままでは使い物にならないのである。

授業時に学生は辞書を持参するものの、カバンの奥底に入れたままで机に向かっていたり、机の上に辞書を置いていても、調べることもせず、辞書をケースから出さないことも多い。授業時にこちらから単語や熟語を調べるように言うと、ケースから辞書を出して調べて、またすぐにケースに片付けてしまうのもよく目にする。高校時に辞書を使う癖をつけていればと思う。

最近ではスマートフォンに辞書を入れている学生がいる。小さい画面で単語や語句を調べていくのを慣れているという言い分があるかもしれないが、紙の辞書の方が調べやすいことを筆者は授業で教えている。電子辞書は紙の辞書と同じ内容が内蔵されているが、動詞の活用表は紙の辞書の方が検索しやすいのである。悪質なのは、スマートフォンやタブレットの翻訳機能や、インターネットで調べて済ませる学生がいることである。課題や宿題を出して、何も自分で考えずにインターネットに頼って答えを作ってくるのである。インターネットの翻訳では間違った解答がよくある。まだ文法で教えていないのに見事な高度な語句や構文を使って答えを書いてくる学生もいる。人間の頭脳が退化していくのが目に見えるようである。

4.5. 授業後の質問

授業終了後に学生がリブレット（オペラの台本）を持って教壇に近づき、「先生、この歌のここですけど。」など言い始めて、譜面にずらっとアルファベットが伸び進んでいる（というイメージの）イタリア語を見せられる。語尾切断やら倒置で書かれているもの、いわゆる古語、方言らしき語が散りばめられていて、学生の学力では意味がとれないであろう類のものである。教員側としても、前もって歌詞を読み易くしたものを学生が用意して、調べたり考えをまとめたりできる時間を取ってくれていれば良いのであるが、ほぼいつも唐突に

学生の質問がやってくるのである。

リブレットにあるイタリア語は、イタリア語を学び始めた者にとって理解し難いところが多々ある。授業で文法をきちんと教え、学生側もそれに応えて日頃からの学習を怠らずにすれば徐々に応用力が付き、自分の力で考えて読み進められるのではないかと思っているが、なかなか現実ではうまく事は進まない。文法の授業で声楽関連のイタリア語に特化したものを作ればとも考えるが、担当教員についての問題が出てくる。

4.6. 習熟度分けのクラス編成

2010 年になる前は、ドイツ語やイタリア語履修の文法クラスはそれぞれ 3 クラスがあったが、2017 年度入学者までは文法のクラスは 2 つに分け、1 年目の AI, AII はそれぞれ 25 人前後の受講者数であった。文法学習では、1 年足らず経過すると、格差が見えてくる。初習外国語は ABC から始めるが、どんどん文法事項を習得していかなければ、2 年以内で基礎的な文法事項を終了できない。さらに、文法事項は積み重ねられていくものである。ひとつの単元が終了し、その単元の内容を全て忘れて次に進むというわけにいかない。英語は 6 年かけて学習してきているが、その学び方のままで大学で初習外国語を学ぶわけにはいかないことは明白であろう。学修年限が限られている上、複雑な文法内容であるためである。

英語での動詞変化に比べると、イタリア語の動詞はかなり奥深いものがある。学生たちに授業で動詞の時制の種類を示すだけで、彼らは黙り込んでしまう。動詞だけではない。冠詞も英語より変化があり、名詞は男性と女性があり、単数と複数もある。性と数に合わせて、形容詞が変化する。その規則を覚えなければやっていけない。このような状況下では、クラスの中でレベル差が格段となって見えてくるのである。落ちこぼれるもいれば、逆に、浮きこぼれも見えてくる。そこで、ドイツ語とイタリア語では習熟度別のクラスを作るため、2018 年度からの 2 年次のクラスを 3 クラスに増やしている。ドイツ語は落ちこぼれた学生たちを集めて新たに 1 クラスとし、イタリア語では 1 年次の授業時で学習意欲が高いと思われる学生を集め、イタリア語文法をきちんと教えるクラスを作っている。習熟度別を始めからの効果については、いずれ報告としてまとめたい。

5. モチベーション

イタリア語が好きなのに上手く理解できず、他の学生よりも学修が遅れても、それでも頑張る学生はそれだけでも素晴らしいモチベーションを持っているが、イタリア語を学び続けるためのモチベーションについて考察してみる。

5.1. 提携校への留学

目標を定めてそれに向かって進むことで考えられることに留学志望がある。大阪音楽大

学では、以前からドイツや英国などの大学や音楽院と提携して、短期留学という制度があるが、イタリアのミラノのヴェルディ音楽院が提携校となっている。提携したのが最近であるため、まだ送り出しの実績はないが、ヴェルディ音楽院で学ぶという目標を立ててイタリア語学修の励みとして欲しいものである。提携校留学のためには、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)のレベルの B1, B2 が必要であると思われるが、本学で2年間の必修イタリア語を学修しても、恐らく A2 のレベルに達するあたりのイタリア語力であるため、留学志望学生のやる気と学習量に期待するものである。

5.2. 実用イタリア語検定試験

既に受検している本学の学生が数人いるが、実用英語技能検定、実用フランス語技能検定試験やドイツ語技能検定試験の実績には到底及ばない検定試験である。その歴史も浅く、受験人数も極めて少ないため、合格したからと言って何かに効力を発揮するまでには至っていないのではあるが、イタリア語の能力を試すための良い試験であると思われる。

本学でイタリア語を2年間の必修で学修し終われば、3級程度の文法力が身についているはずである。

5.3. 大学院進学について

大学院に進学するために外国語学習に力を入れるのも一つのモチベーションになりうるが、本学では2014年度から大学院の入試科目の外国語が英語に一本化されている。文部科学省の方針に適合するものであろうが、声楽専攻の学生にとっては、高等学校で習って以来の英語を学び直さなければならないであろう。大阪音楽大学の大学院進学のための英語科目が作られているのは、進学に向けての手当てがなされてきているのであろう。イタリア語は大学院で声楽研究を深めるために役に立つかもしれないが、大学院進学のための目的であればイタリア語は要らないことになる。しかし、他大学の大学院でイタリア語が入試科目がある場合は、大学院進学のためのイタリア語学修が良いモチベーションとなるであろう。

6. 音楽大学でのイタリア語とは

音楽が好きだから、音楽がやりたいから大阪音楽大学に進学した。そして、イタリア語に出会った。個人的な意見ではあるが、イタリア語は耳に心地よく響く音楽的な言語である。巻き舌や gli の発音に悩まされるかもしれないが、強弱のリズムをつけて元気良く発語すれば、それは素晴らしいものであると思う。文法構造をよく学び、どこに強弱をおけば良いのかを理解できればもっと世界が広がるはずである。声楽の学生だけでなく、音楽大学で学んでいる学生にはイタリア語を楽しんで学んで欲しいものである。学習し始めてほどなくしてイタリア語が難解な言語であり、覚えなければならないことの多さにうんざりしてし

まうことがあるかもしれないが、忍耐と継続、努力を持ってして切り抜けて行って欲しいものである。

数年前に少々ゆっくりと卒業した学生がいた。彼女はイタリア語が好きでたまらなくて、授業中に変な答えを出したり、同級生に馬鹿にされたりしても、イタリア語が大好きで頑張っただけで卒業まで漕ぎつけた。彼女の努力にこちらが脱帽したことをよく覚えている。

声楽専攻に限らず、音楽大学でイタリア語を難しくても楽しく履修して学修し終えることができる方策がないものかと、常に筆者は模索しているが、まだ答えは出ていない。

6.1. 音楽大学ならではのイタリア語学修のヒントとして

声楽専攻の学生たちにとっては、イタリア語を理解すると言うより、発音をきちんとして歌えれば良いのだ、と言う乱暴な主張をあちこちから聞いてきた。学生から、「試験に出ますか?」「試験に出さないのならやらなくていいのでは」というような言葉を浴びせられたことがある。学生たちのみならず、声楽の教員から、「要するに発音できればいい」という意味の言葉を耳にしたことがある。声楽専攻の学生たちにイタリア語文法を教え、確実に読解力を身につけるように工夫をと考えている人間に失望と挫折感に浸らせるものである。

一方、イタリア語に関する知識が必要であることを、ある授業を通じて再認識する機会があった。本学には「文化とオペラ」という講義科目がある。一つのオペラを取り上げて、教員が数回ずつ担当していく授業である。2021年度後期に、「文化とオペラ」の授業の内での、リブレットの中のあるシーンの、レチタティーヴォの解説を行う授業を見学した。授業はコロナ禍の中、Zoom を使った遠隔授業ではあったが、授業資料としてリブレットのコピーとその日本語訳が学生に配布され、そのリブレットのイタリア語の歌詞の中のそれぞれの単語を音節で区切り、強弱や長短を見極めていく、非常に興味深いものであった。何が興味深いかというと、イタリア語の文法的知識があつてこそ、レチタティーヴォでの、強調する部分などが納得がいくということであった。レチタティーヴォは詩であり、文学作品であり、イタリア語を学習していなければうまく読めるわけではないと痛感した。声楽専攻でオペラに真剣に取り組む者は、必ずイタリア語文法を仕上げておくべきであると思った。試験に出ない、あまり目にしないから勉強する必要がないなどはとんでもない話であると再認識した。

管楽器の教員から、音楽用語についての質問を受けたことがある。agitato と slanciato はどういう意味であるかという質問であった。agitato は agitare 「振る、揺らす」の過去分詞であり、slanciato は slanciare 「放り投げる」の過去分詞である。過去分詞は形容詞として用いられ、「～した、～された」という意味となる。辞書を持ち合わせておらず、即座に手の動きを使って説明してみた。過去分詞は動詞から意味をとるので、agitato については、agitare の動作、つまり、両手を上下や左右に激しく振り動かし、slanciato については、片手で握った何かを放り投げる仕草をしてみたところ、その教員は「あ、わかりま

した」と納得がいったようであった。agitato はよく目にする音楽用語であるが、slanciato は後日、音楽用語辞典を調べてもよくわからなかった。作曲者によっては思いもよらないイタリア語を楽譜の中に添えることがあるのかと感心するとともに、楽譜でそのような語に遭遇することもあるのだから、音楽人はイタリア語の文法知識を持ち合わせておくべきであると思った。

音楽用語は、ドイツ語やフランス語起源のものもあるが、ほとんどはイタリア語である。小中学校の頃に習い覚えた意味の奥にある、本来の意味を学び取ることも重要なことであると思われる。

6.2. 教科書について

現在出版されているイタリア語の教科書は、週 1 回の 1 年間の授業で使い切ることができそうな簡略なものや、イラストで単語を示して色刷りの綺麗な見た目重視のものや、中身を見ると、音楽専攻に必要な遠過去の時制についてが省かれていたり、会話重視に偏り過ぎて、文法をしっかりと学ばせたいのにそうもいかない教科書だらけである。イタリアで出版されている外国人のためのイタリア語学習テキストも日本人に適したものに合えない状態である。

教員が担当する授業は、その教員が自分が教えやすい教材を自分で作成するべきであると思う。ただ、教科書作成には多大な労力や時間が必要で、授業や研究等に忙しく振り回されている教員にとってはなかなか実現できないことである。

6.3. イタリア語担当教員について

極端に言うと、大学教員は教職免許を持っていなくても教員になることができる。

旧大阪外国語大学⁽¹³⁾と統合後の大阪大学で「言語教育プログラム改革」という取り組みを始めた研究者が語った講演記録⁽¹⁴⁾によると、大阪外国語大学での各専攻語の学生たちからは不満の声が多く出ていたことがわかる。例えば、読んで訳すだけの授業ばかりで、留学したことのある学生だけが専攻語を話せる、ネイティブの教員から会話を教えてもらえない、1年生より2年生の教科書の方が簡単だった、専攻語を学びたくて入学したのに期待外れだったという声が多かったようである。同研究者は、言語学と文学の専門を持って専攻語を教えている教員が半分以上いて、言語教育学はゼロではなく、少しいることと、社会科学系の専門や、政治史や経済が専門の研究者もいて、中には語学教育は専門ではないと公言し、私に外国語を教えろという方が間違っていると言いながら授業をする先生もいると語っている。

本学のイタリア語教員も、専任と非常勤講師の全員が、語学専門ではない。文学や、歴史や、文化史を研究してきた教員たちである。しかしながら、教歴は長く、実地経験を積んで現在に至っているので、それぞれの教育法に自信を持っている筈である。しかしながら付加すれば、音楽にも通じている、音楽がわかるイタリア語教員であることが理想であると筆者

は思っている。音楽を知っていることで、音楽とイタリア語と結びつけ、音楽に関連する何かを無意識にでも授業で活用できれば、それだけ学生の興味をひくと思われるからである。

7. 最後に

本学のイタリア語学修に関しての、現状や問題点を色々と列挙してきたが、音楽大学のイタリア語がどうあるべきかについてはまだ探るべきことが色々ありそうである。

イタリア語の授業を学生の専攻の科目に活かせるようにするには、専攻側の教員との話し合いや、需要と供給を出し合うことであると以前から考えている。教員間でのコミュニケーションをとって、何がそれぞれの授業で必要か、何を提供できるかを明らかにできれば、学生の学習効果にもつながり、うまく学修することが出来るのではないかと考えている。

これからの展望として、教育方法の構築を目指しながらさらに模索していくことにして、本論をここで終了する。

注

- (1) 文部科学省 HP で閲覧できるが、「大学における教育内容等の改革状況について」（平成 20 年度）に、大学の国際化に向けた取組状況＜外国語教育の改革＞ ①外国語教育の実施状況の項目がある。その記述によると、国立、公立、私立大学の計 746 校からの集計結果で、英語が 715 校、フランス語が 531 校、ドイツ語が 528 校、中国語が 610 校で実施されており、一方、イタリア語については 118 校となっている。同報告ではその次の英語教育についての項目が続き、英語教育に力を入れている様が明らかである。平成 29 年度の「大学における教育内容等の改革状況」では、外国語教育に関する項では英語教育を中心に上げられており、諸外国語科目についての記述は見当たらない。
- (2) 敢えて言えば、フランス語科目で学部では受講学生数がドイツ語やイタリア語に比べて少なく、短期大学部では既にフランス語科目は無くなってしまっている。短期大学生がフランス語を受講する場合は、学部のフランス語科目を受講する仕組みとなっている。
- (3) 大阪音楽大学ホームページ上の、情報公開 自己点検評価 FD/SD 活動 から認証評価結果報告書を読むことができる。また、本学が提出した自己評価報告書も公開されている。
- (4) ドイツ語のネイティブの非常勤講師が、声楽部会からの直接の依頼で長年にわたって大学院のコミュニケーション系のクラスを担当していた。正確にその授業がどの

期間に継続していたかは外国語部会が関与していないため不明である。「ドイツ語発語法」が科目名で、2010年度までは通年科目であったが、2011年度以降は「ドイツ語発語法A・B」の前期・後期科目に名称が変更された。当該科目は2017年度までは開講されていたが、2018年度からは受講登録学生がいないために開講中止が続き、2021年度4月に体調不良を理由にネイティブの非常勤講師が退職したためか、2022年度は当該科目は消滅してしまっている。イタリア語については、ある大学院生（声楽）がオフィスアワーを利用してイタリア語の質問をしてきたことが数年前にあり、イタリア語文法を学習する機会がないと言っていたことと、2022年前期に、イタリアの提携校への留学を希望する大学院生が、イタリア語の学習をここ数年間していないので、どうすれば良いかわからないと言っていたことが筆者には気にかかることであった。声楽部会に大学院のイタリア語についての手当てができていないかと尋ねたが、出来ているという回答だった。

- (5) この項は以下の文献を参考にした。

田中 慎也 「大学「外国語教育」と「大学外国語」教育」『産研通信』 No. 56 桜美林大学 2003 pp. 23～25

林 正人 「大学設置基準大綱化後の共通（教養）教育の抱える問題」『大阪工業大学紀要 人文社会篇』第48巻 第2号 桜美林大学 2003

- (6) 田中(2003) p. 23

- (7) 文部科学省のホームページから、過去の様々な年度の「大学における教育内容等の改革状況について」の報告書を読むことができる。高田(2005)が引用している平成15年度の報告書では詳細に外国語教育の実施状況が記述されているが、例えば、平成21年度の報告書では外国語に関する記述が減っており、平成27年の報告書では、外国語に関することといえば英語のことばかりである。

・平成15年度報告については文部科学省のHPから削除されているが、国立国会図書館インターネット資料収集保存事業のページ(warp.da.ndl.go.jp)から検索し、閲覧可能である。

・平成21年度報告

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf

・平成27年度報告

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1398426_001.pdf

- (8) 高田 和文 「大学におけるイタリア語教育の現状と第二外国語学習の意義について」『静岡文化芸術大学研究紀要』VOL. 6. 2005

- (9) 高田(2005)のこの数字は少し現実とは違っていただかもしれない。表には、初級2ク

ラスで 83 人、中級 3 クラスで 122 人、上級 1 クラスで 15 人となっているが、2003-2004 年当時は、イタリア語クラスは 1 学年に 3 クラスずつあり、第二外国語のイタリア語 A・B にも 20~30 人の受講学生がいたと記憶している。アンケートへの回答は、直接イタリア語科目の担当者から得られたものであると同論文の注に書かれているが、直接イタリア語科目を担当していた筆者にはアンケート回答についての問い合わせはなかった。

- (10) 筆者が担当したイタリア語クラスで 4 月の授業開始時に学生に自己紹介を紙に書いて提出させたことが今までによくあったことだが、声楽専攻だからイタリア語を選択したという文言はよく目にしてきた。
- (11) 「声楽基礎演習 A I・B I」でイタリア歌曲、「声楽基礎演習 A II・B II」で日本歌曲とドイツ歌曲を履修するカリキュラムになっている。
- (12) 森田 学 『解説がくわしいイタリア語入門 (CD 付)』 2014 白水社
- (13) 大阪外国語大学は 2007 年 10 月に国立大学法人大阪大学と統合した。
- (14) 真嶋 潤子 「大学の外国語教育における CEFR を参照した到達度評価制度の実践—大阪大学外国語学部の事例を中心に」 『外国語教育フォーラム』 金沢大学外国語教育研究センター 2010

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目
(2021年度)

修士論文の題目

1. 作曲専攻(音楽学) 金山 将太
(論文名) F.クープレンのクラヴサン作品における発想標語 その用例についての分析的研究
2. 作曲専攻(音楽学) 坂井 威文
(論文名) コロナ禍の活動で顕在化した日本の合唱の構造
ーテレコーラス・プロジェクトを事例としてー

修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目

3. 声楽専攻(オペラ) 香川 梨佳
(演奏曲名)
G.Rossini Il Barbiere di Siviglia
(論文名) ロッシーニ作曲 《セビリアの理髪師》 ～パイジエッロの作品との比較～
4. 声楽専攻(オペラ) 野口 真瑚
(演奏曲名)
G.Donizetti Anna Bolena
(論文名) ドニゼッティのオペラ 《アンナ・ボレーナ》
～台本と音楽から読み解くアンナ・ボレーナの人物像～
5. 声楽専攻(オペラ) 長谷川 弥紀
(演奏曲名)
C.Gounod Faust
(論文名) ゲーテの原作から読み解くグノーのオペラ 《ファウスト》
6. 声楽専攻(オペラ) 深田 真琳
(演奏曲名)
R.Strauss Ariadne auf Naxos

(論文名) R.シュトラウスのオペラ《ナクソス島のアリアドネ》における悲劇と喜劇

7. 声楽専攻(歌曲) 森本 桜

(演奏曲名)

O.メシアン/「ミのための詩」より 感謝の祈り

O.Messiaen/《Poèmes pour Mi》 Action de grâces

風景 Paysage

首飾り Le collier

かなえられた祈り Prière exaucée

O.メシアン/「天と地の歌」より ミとの長い時間

O.Messiaen/《Chants de terre et de ciel》 Bail avec Mi

かわいいピリユールの踊り Danse du bébé - Pilule

清らかなにじ Arc-en-ciel d'innocence

真夜中の裏表 Minuit pile et face

(論文名) 歌曲集《天と地の歌》におけるオリヴィエ・メシアンの家族関係

8. 器楽専攻(ピアノ) 古山 梨衣

(演奏曲名)

M.ラヴェル(J.シャルロ編曲) マ・メール・ロワ

第1曲 〈眠りの森の美女のパヴァーヌ〉イ短調

第2曲 〈おやゆび小僧〉ハ短調

第3曲 〈パゴダの女王レドロネット〉嬰へ長調

第4曲 〈美女と野獣の対話〉へ長調

第5曲 〈妖精の園〉ハ長調

M.ラヴェル クープランの墓

第1曲 〈前奏曲〉ホ短調

第2曲 〈フーガ〉ホ短調

第3曲 〈フォルラーヌ〉ホ長調

第4曲 〈リゴドン〉ハ長調

第5曲 〈メヌエツト〉ト長調

第6曲 〈トッカータ〉ホ短調

(論文名) ラヴェルのピアノ作品に見られる古典性 ―サン＝サーンスからの影響と独自性―

9. 器楽専攻(ピアノ) 佐野 令奈

(演奏曲名)

L.シュンケ ピアノ・ソナタ ト短調 作品3

- 第 1 楽章 Allegro
- 第 2 楽章 Scherzo-Molto allegro
- 第 3 楽章 Andante sostenuto
- 第 4 楽章 Finale-Allegro

R.シューマン ピアノ・ソナタ 第 2 番 ト短調 作品 22

- 第 1 楽章 So rasch wie möglich
- 第 2 楽章 Andantino-Getragen
- 第 3 楽章 Scherzo-Sehr rasch und markiert
- 第 4 楽章 Rondo-Presto

(論文名) ルートヴィヒ・シュンケのピアノ・ソナタ ト短調作品 3 についての一考察
 —ロベルト・シューマンのピアノ・ソナタ第 2 番 ト短調作品 22 と比較して—

10. 器楽専攻(ピアノ) 長阪 花音
 (演奏曲名)

- F.リース シラーの詩「あきらめ」による幻想曲 変イ長調 作品 109
- L.v.ベートーヴェン ピアノ・ソナタ 第 31 番 変イ長調 作品 110

(論文名) フェルディナント・リース 《シラーの詩「あきらめ」による幻想曲》作品 109 の研究
 —ベートーヴェンからの影響と独自性—

11. 器楽専攻(ピアノ) 山野 太士
 (演奏曲名)

- A.ヘンゼルト 12 の演奏会用性格的練習曲 作品 2 より
 - 第 4 番 変ロ長調 Duo. Repos d'amour
 - 第 12 番 変ロ短調 Plein de soupirs, De souvenirs, Inquiet,
 hélas! Le coeur me bat.
- A.ヘンゼルト 12 のサロン用練習曲 作品 5 より
 - 第 6 番 変イ長調 Danklied nach sturm
- A.ルビンシテイン 6 つの練習曲 作品 23 より 第 2 番 ハ長調
- S.ラフマニノフ 絵画的練習曲「音の絵」作品 39 より
 - 第 1 番 Allegro agitato
 - 第 3 番 Allegro molto
 - 第 6 番 Allegro
 - 第 7 番 Lento
 - 第 8 番 Allegro moderato
 - 第 9 番 Allegro moderato

(論文名) ラフマニノフの《音の絵》作品 39 の特質:ロシア・ピアノ楽派のエチュードの指向性

12. 器楽専攻(ピアノ) 吉村 茉莉亜
(演奏曲名)

A.シェーンベルク 6つの小品 作品 19
A.ベルク ピアノ・ソナタ ロ短調 作品 1
A.スクリャービン ピアノ・ソナタ 第7番「白ミサ」作品 64
八村 義夫 彼岸花の幻想 作品 6

(論文名) 八村義夫の表現主義 —《彼岸花の幻想》作品 6 を中心に—

13. 器楽専攻(管弦打) 岩崎 捺美
(演奏曲名)

P.ルルー／ヌース Philippe Leroux／Noûs
ジャン＝ドニ・ミシャ／シャムス Jean = Denis Michat／Shams

(論文名) E.デニゾフ以後のクラシカル・サクソフォーン作品における微分音の効果と分類

14. 器楽専攻(管弦打) 吉田 侑記
(演奏曲名)

J.フバイ／クレモナのヴァイオリン作り
Jenő Hubay／Der Geigenmacher von Cremona
J.ブラームス(J.ヨアヒム編曲)／ハンガリー舞曲 第2番
Johannes Brahms (arr. Joseph Joachim)／Ungarische Tänze Nr.2
J.ブラームス／ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第3番
Johannes Brahms／Sonate für Violine und Klavier Nr.3

(論文名) J.ブラームスのヴァイオリン独奏曲における演奏実践の研究
—J.ヨアヒム、J.フバイの演奏分析を手がかりにして—

[作曲者名、演奏曲名は修士演奏会のプログラムに基づく。また、論文名は本人記載の題目届に拠る。]

執筆者一覧 (掲載順)

藤本 敦夫 (教職)

クリンガー ウォルター カート (外国語)

谷口 真生子 (外国語)

研究委員会構成員 (五十音順)

*西村 理 赤松 林太郎
谷口 真生子 福榮 宏之
松田 昌恵 松本 昌敏
吉村 治広

*印は編集代表

研究紀要 第六十一号

2023年3月1日 発行
(2023年3月31日 WEB公開)

編集 研究委員会

発行 大阪音楽大学
大阪音楽大学短期大学部
〒561-8555
大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番8号
電話 06-6334-2136
URL : <http://www.daion.ac.jp/>

ISSN 0286-2670

BULLETIN
OF
OSAKA COLLEGE OF MUSIC

Vol. LXI

2022

Contents

Summaries (1)

Article

A Historical View of Japan's "21st Century Education Reform"
..... FUJIMOTO Atsuo (4)

Notes

Songs from Musicals for EFL Classes Walter Kurt KLINGER (24)

Problemi vari dello studio della lingua italiana all'Osaka College of Music
..... TANIGUCHI Makiko (40)

Published by
Osaka College of Music
Osaka Junior College of Music
Osaka
JAPAN